

武田信玄
長尾謙信
本朝廿四孝

座本 竹田 因幡 掾

厚嗣春は曙やうやく白くなりゆくまにに。
雲間の若菜青やかに摘出でつゝ。霞だちたる花の頃は更なり。さればあやしの賤までもおのれくが品につき。薄き祝ふ年の兄。ましてやいとまんごとなき。大樹の下の梅が香や。先づ咲き初むる室町の。オロク御所こそ花の盛なれ。君は足利十二代源義晴公。左大臣に任官あり武威海内に輝きて。偃ふす六十六つの花。ホラ豊なる世の貢物。地殊更妾の腹に御男子懐胎ありければ。なほもめでたき春ぞとて北の方手弱女御前。相州の大守北條相模守氏時。越後の城主長尾三郎景勝。其外参観の大小名。大流小流松竹島臺路の臺。かゝる時代におほ廣聞

フシ各。賀儀を申さるゝ。地氏時御前に謹しんで。御御先祖足利尊氏公。二つ引兩の旗を以て。天下の棟梁となり給ひ。五畿内は申すに及ばず八隅の外まで威勢に靡き。面を上ぐる者もなき所に。頃日に諸國にわれくの合戦起り。就中甲斐の住人武田晴信。越後の謙信と鋒先を争ひ。君命に従はざる條上を恐れぬ行跡。きつと糺明もあるべきを。その儘に差置き給ふは且は武威の薄きに似たり。如何計らひ候はんと。フシ我は顔に言上す。地義晴打領かせ給ひ。我も此事歎かはしく。兩家和睦を調へんと。先達て兩國へ此旨を申遣はし置く。さりながら謙信が嫡子三郎景勝。疾くより我に昵近し忠勤厚き

武士。只心得がたきは親謙信。悴を上し今日まで。上洛致さぬ心底訝かし。地親の心子知らずといへども。父の心中よも知らざる事あらじ。フシ景勝。いかにとありければ。地三郎大きに恐入り。御親謙信儀老體の上。多病によつて引籠り罷在れば。名代の景勝。君御召の御説の趣。早速申達しつれば。上洛の日限も一兩日の間は過ぎず。又晴信と不和なるは。彼の家に傳へし諏訪法性の兜。隣國の誼に借受けしを。武田の武勇を羨むなど下様の悪口。一徹短慮の親ども彼是詞戰ひより思はぬ確執となりし事。如何ばかり我等が歎き。地まづ晴信を召寄せられ君の御詞を添へられんに。誰か否と申すべきと詞の半。北條の家臣村上左衛門罷出で。御武田晴信參上と。地取次ぐ聲にお次の襖引立烏帽子のおのづから。智勇備はる甲斐の國。武田大膳大夫晴信。フシ

御前間近く出仕あり。地手弱女御前の宣ふやう。武勇烈しき長尾武田。君の柱と思召し。兩家和睦を圖らせ給ふ。有難き御上意ぞやと。地傳へ給へば義晴公。調汝謙信と不和の基。法性の兜とやらん。武田の家の重寶とは何れの代より傳はりし。語れ聞かんと仰せける。晴信取りあへず。さん候もと此兜は我等が氏神。諏訪明神より夢の中に賜つて、明神の使はしめ八百八狐是を守護す。神通力加はつて是を著する度毎に。合戦勝利を得ざる事なし。越後の謙信隣國の誼拜せん望み黙し難く。彼方へ持たせ遣はせしが。俗に言ふ心安きは却つて不和の基とやらん。畢竟何の詮なき争ひ。晴信に於て聊も。御説に漏るゝ事あらじと。フッおとなしやかに述べらるれば。北條氏時進み出で。國コレ晴信。兩國合戦に及ぶ一大事。子供寛のいさかひ同然よも左様

の事ではあるまい。兼て親しみある甲斐越後。故もなき合戦は東八ヶ國を騷動させ。其虚に乗つて大將の御所を騒がす。兩人が言合せの軍と御疑ひかゝつた上。輕々しき和睦の受合。猶以て吞込まぬ。地必定野心なき言譯。フッ聞かん〜と詰めかくる。地主の尾に付く村上左衛門。國氏時公の御眼力あつばれ黒星。ぬらりくらりのぬめた晴信。謙信の狸入道。長尾の小狐化顯はせと。地何がな支へる心の底。一物ありと見て取る景勝コレ村上。御邊は信濃國の住人。晴信謙信合戦の節も隣國の加勢に事寄せ。兩國をしてやらんと召されしかど。底意知れずと測りし故先づ御邊から攻討しに。牛房程な尾を振つてはふ〜に逃げられしが。都へ上り氏時殿に媚酒ひ〜食客の陪臣奉公。其無念を晴さんと我々が中を割きたがる。夫はともあれ君の御説。御邊達が出過ぎふ聲も誓願寺。茶屋の床几に硯箱發句俳

の助言。すつこんでお居やれと一口にやり込められ。フッ面を赤めて閉口す。北の方聲うるはしく。假初の詞にも猛きは武士の習ひにて此争ひを鎮むるは。弓矢の力に叶はぬ事。地胡國とやらんの夷だに王昭君の色にめで。陣を引いたる例もあり。國景勝の妹に八重垣姫とて聞ゆる美人。武田には勝頼とて年頃同じ子のある由。軍を直に縁の端我が君の御媒。幸ひ今日の此島臺齡も相生松竹に。花菱は武田の印。竹に雀は景勝の烏帽子の長尾末かけて。中睦じう致されよとフッいと畏まる御計らひ。コハ冥加なき御媒。君が仰せのかひあつて。フッ互に力越後の國。中を結びし大將の詞は木曾の棧道や。踏みかためたる足利の家の。榮ぞ。大ニ久しけれ。地名に高き軒端の梅の色そへて若老男女わかちなく。願

講三十一文字。歌に和らぐ都の地、フシ今
 を盛の梅が香や、堀左大臣義晴公の妾、賤
 の方を設けの幕打廻したる花の下。木下
 蔭の宿より、スエ御身に懐る五月の。帯
 の悦び身の願ひ。腰元婢に至るまで綺麗
 を飾りし飯乗物。御供には直江山城之助。
 跡に引添ふ徒士若黨中間小者にいたるま
 で。茶辨當から烟草盆。フシ皆取揃へ歩み
 来る。堀山城は心得て。調申し、賤の
 方様もう是が誓願寺。暫し是にて御休み
 と。堀申上ぐれば賤の方。フシカ、リ御乗物
 を出で給ふ。フシ花もおさるゝ御姿。堀ナ
 ウ山城。今年は取分け誓願寺の。花も一
 入盛と聞き。義晴様に願ひを立てて来り
 し故。其方家もいかい苦勞と。堀仰せに山
 城頭を下げ。堀ハア有難き御詞。コレ腰
 元衆向うに見ゆる山々を。賤の方様に一
 一教へ申されよと。堀指圖に三橋がしや
 くり出で。調申し賤の方様御覽遊ばせ。



堀アレ、向うの高山は比叡山と申して
 都の富士。扱其次は銀閣寺棟も名高き高
 臺寺。名高き事を釣鐘に。ギン鳴響かせし
 千疊敷。大佛様と背殿の。三十三間堂。

又。此方なは鞍馬山。調僧正が谷の御に響
 く。堀菩薩池の、フシ水の音。フシカ、リサツサ
 加茂川流れも清き。上加茂下加茂金閣寺。
 衣笠山の五體佛。ギン西行櫻。三條小橋

出逢うた所が壬生の寺。四條河原の芝居
 側。朝はとうから〜と。待兼山の時鳥。
 夫は。町中のじやれ詞。フシ聞きに北野の
 天神様。三十一文字の歌よりも。當世流
 行る阿漕が土。どうした事やら此頃は。
 文の便もない戀中の。オタリ數も。よまれ
 ぬフシ螢火や。地祇園の社楊弓の音はか
 つちりとん〜と。當り。初めたる通天
 と。口合たら〜だら〜と。長こと〜
 を言ひければオタリ皆々。へ興にぞ入り給
 ふ。三下り歌火黒舞を見さいな福大黒を見
 さいな。新玉の年の始の福大黒と聲しを
 らしき。フシ幕の本。地ざ〜めく女中と
 り〜の中に入る山城が機嫌上戸も。腰
 元の膝にもたれて。四ヨウ〜。春
 の始の福大黒。打つにつこりのぼつとり
 風。男たらしのすつばより。可愛らしい
 は此三橋。地こん〜九獸の折も幸ひ大
 黒舞。所望々々とせり立てられ。地早や



愷氣する女氣の。歌大黒舞を見さいな悪
 性大黒見さいな。一に色ある顔付で。ヤ
 二につこりお笑ひ顔見れば見る程腹立
 の。四つ餘所の色取りに。五つ因果な見
 初めて。無性に可愛い其中は。連理の契
 りとわしや思ふ。福大黒見さいな。開ホ
 ホ、おめでたうござりますと。地頭巾
 を取れば賤の方の召使。名も八つ橋の器

量よし御傍に手をつかへ。今日の御供に外れしより。思ひ付の大黒舞お恥しやと袖おほふ。賤の方興に入り。爾ヲ、それも自らを慰めの爲。嬉しそやと御仰せ。山城はもぢ〜と思ひがけなき八つ橋に。見付けられたる此場の時宜。赦せ〜も目顔で知らせ。我等は寺へ御出の様子。申入れんと立上り。住持の方へ急ぎ行く。地跡へのさ〜歩み来る。村上左衛門義清直では行かぬ面魂。賤の方と見るよりも御傍につつと寄り。何今日はお出の様子承り。御跡慕ひ某が申上げたき一通り。八つ橋もよつく聞け。主君北條氏時賤の方のお姿に迷ひ。明暮千千の物思ひ。餘り見るめもいたはしく申上ぐるも憚りながら。彼方のお心一つにて。氏時様の悦びは外へは行かぬ御身のため。黙れ村上。脇妻妾と言ひながら。義晴様の胤を懐せし自らなれば。いはゞ

主従ア、其御了簡小さい〜。主にもせよ家來にもせよ。國家の政道治め給ふ氏時公。日陰者と云はれうより。北の方になるのはお嫌か。コリヤ八つ橋其方向いて計り居すとも。汝も共々お勤め申せ。又汝にはおれが首だけ。思ひは同じ戀の媒。何と嫌か。ア、いやではあるまいがと。縫れかゝれる咽の下。髭顔びつしやり立退く八つ橋。コリヤ〜逃げても逃がさぬとしなだれ廻るヲ後の方。折よく歸る山城が。走り寄つて腕もぎ放し。コレ村上殿。御酒機嫌か知らぬども。女を捕へさりとは〜不行儀千萬。地ちと御暗みなされよと。いふに八つ橋小氣味よく。お前前の戻りが遅い故。それは〜モウよい〜委細は聞いた。何の村上殿が無理おつしやらうナウ義清殿。定めてそれは座興でがなと。知つても知らぬ直江が風情。義清も底氣味悪く。

ナニ賤の方様。未だ御參詣なさらずば。某御供仕らん。直江殿には是にて御休息と。何がな追従賤の方。過つて改むる義清が今の一言。只何事も見す聞かず。八つ橋直江は此所にて。自らが下向を待ちや。供は村上皆の者。サア〜おちやと立ち給ひ行くも二人が戀中を。それと推して本堂へヲ打連れてこそ詣でらる。嬉しき八つ橋が見かはす目元渡りに船。首尾好い逢瀬と抱付けば。ア、嗜みや〜。一つ館に居りながら。たまに逢うたか何ぞの様に。若輩な人では有るわいの。イエ〜何ぼ其様に言はしやんしても。懐しいは女の癖。奥へ通ひの長廊下。情らしうて屹としたその殿振を思ひ初め、逢ふも千歳の縁結び。かうじ〜五月の兒を懐した中ちやもの。戀しうなうて何とせう。人ばかり物思はせ惜いお方と山城にこぼす

涙は。戀の淵。詞サア〜道理ぢや〜。わしととも其方の事可愛うなうて何とせう。どうで其方にお暇賜はり。誰憚らず女夫ぢやといはれるが互の楽しみ。無事で安産する様と。神佛を祈つてゐると。

聞か嬉しさは百倍の心ときめく八つ橋が。ちよつと〜に山城も。下地は好きなり御意はよし。手を引合うて乗物へ無理に伴ふ折からに。早や御下向と供廻り。出るも出られぬ八つ橋が。内と外とにフシ氣遣ふ二人。乗物參れと村上が。指圖に心得腰元が。明けて悔り戸をばつたり。あせる山城呑込む左衛門。コレサ腰元乗御乗物を明けたり鎖いたりエ、聞えた。コリヤ其内に何者ぞ居るに極まつた。地イデ改めん立寄るを。賤の方暫しと止め。最前ちらりと見し所。此乗物を目がけ逃込んだは儲に難鳥。よし何にもせよ其儘で連れ歸り。詮議は館で

ナウ山城と。此場の難儀をフシ助くる情。直江が心の悦びは。割つていはねど乗物の内より洩るゝ有難涙。降つて湧いたる子寶の行末。長き下向道伴ひ。館へ三更歸らるゝ。梅と櫻の花よりも。本フシ爰に咲かせし室町の。

庭も玉敷く奥御殿。義晴公の北の方たをやめ御前。身は本妻の儘なれど君の寵愛淺からぬ。賤の方の懐妊を御身かへて御介抱。勞はらるゝも勞はるもフシ何れ劣らぬ品容。イヤ何八つ橋。今朝から賤の方様のお顔持が悪い故。殿様にもことなうお案じ。心がかりは昨日の供先。若しや怪我でもなかつたかと。尋ねに兎角答へ我が身の戀にからまれて言ふも。いぶせきフシ胸の内。思ひを察して賤の方今に初めぬたをやめ様のお心遣ひ。嬉しさ餘る願ひ。何の怪我がござりませう。それはともあれ。貴方は

定まる御本妻。賤しい此身を上に立て。結構過ぎた御挨拶やつぱりどう仕やう仕やと。仰つて下さりませ。是はあられもない。自ら殿様に馴初めにより今において子を備けず。朝夕祈りし甲斐ありて。お前にお廬を宿されしは。取りも直さず我が子同然。殊に左孕は御男子のしるし。足代の御世繼と思ふ程猶あなたが大切。怪氣嫉妬は姫御前の。習ひといふも。フシ下の。思ひ違ひし詞の裏。よしなき事を苦に病んで。若しもの事があつては大事のお身のさゝはり。最前から間もあれば。コリヤ八つ橋奥へ伴ひお慰みに琴の組でも續松でも始め。お心を引立てよと。残る方なき御恵み。伏拜む手に降る涙何といはでの。苔の露曇らぬ底の水鏡磨き合うてぞ。フシ入りける。おのが權威に案内せず明く

入来る北條氏時。我

慢の鼻も立烏帽子。御座の間に、フシ長まり。御見ますればお女中ばかり晴信も景勝も未だ出仕致さぬかな。ヲ、誰ぞと思へば氏時。知らせなければ何時の間に見えたやら。イヤ御存じなくとも此氏時。勤むる所はきつと勤むる。それに何ぞや在番で候などと。人前作る知行盗人。某同然に思召す北の方のお心入いかに結構さばくとて。白い黒いの別ちもなく。御前様とはいはれませぬ。誰憚らぬ御身にて不斷お妾を上に立て。大切になさるゝ程却て御身の敵となる。賤の方の心底黒い眼で見抜いて置いた。斯くいふ中心も心がり。早く館を選ざげ給へど。口から出次第、フシ言廻せど。何様も召しまするいざ御入と。殿様の召しまするいざ御入と。深く入り給ふ。守らぬ村上左衛門。はちくり返つて打

通れば。氏時聲かけヤレ待兼ねし村上。サア、近う。に額際、つき合ふばかりに座をしめて。昨夜しめし合せし通り。心をかけし賤の方奪ひ取るは今宵の内。表門へは人目もあり、豫て用意のあの抜井戸。釣出す工夫もして置いたこの上望むは晴信景勝、不和なる中を幸ひに二人へ被付け同士打させ。甲斐も越後も我が領分。親子とは言ひながら謙信が胸の中。某が思ふ所存もあれば邪魔にならぬはかの一人。心がかりの晴信景勝了うて取るが上分別。其片腕は村上義清。ハア仰せ迄もなく存じの通り某も元は信濃の領主なりしが。晴信謙信に切取られ其許の情によつて。主従の約をなせし上は再び信州へお歸しあらば此上もなき拙者が悦び。ホ、我が望み達せし上は。元へ納むる信濃の領主。氣遣ひあるなと、氏時が。當なき國の切取り咄。後に聞入のあるぞとも知らず思はず見合す顔。ヤア長尾三郎景勝。出仕致さば案内して。ナゼ奥御殿へ通らぬと。べいひしぎにちつとも動ぜず。出仕の時は先づ人並の所にあつて。其後奥へ通るが作法。ム、然らば其方は最前から。イヤたつた今何もかも。イヤ何が何と。イヤサ。お二人のお咄の終る所へ参りかゝり。御挨拶もそれ故延引。御兩所御苦勞千萬と、寄らず障らぬ景勝が。落付く詞に落付かぬ。破れかぶれと義清が。切付くるをかいくり。イヤ何科あつてお手討にイヤサ。謙信が子とは知りながら。ついに是まで手練を知らず。武藝の試み少しの差出。ム、拙者が手の内試みあらば。など尋常の勝負もなく。子供童の切合同然。卑怯至極の左衛門殿。お望みならばお相手と。言はれてせき立つ村上

が。廣言憎しと又切る刀。鏝元むすずと引
掴み。是非知りたくば腰骨に。覺えられ
よとどうど投げ。地膝に引敷く途端の拍
子。切込む氏時受けたる早速。地北の方
の聲として。天晴願もし三郎景勝。武
藝の試み氏時も義清も。見やつて嘸や本
望と。地それといはねどしら化の無念を
稍にッシ納むる兩人。挨拶もなく立つて
行く。詞イヤなう景勝。其方の父謙信は
日外より上落せず。様子あらんと思ひの
外近々に上京との噂。我が君にもお待兼
ねと。地仰せに三郎頭を下げ。親謙信が
不行跡。御怒りの色目もなく。慕ひ給は
る有難さ。地親子が面目是に過ぎじと詞
の半へ小姓ども。調出仕の様子聞し召し。
早う呼べとの仰付でござりまする。ほん
に自らとした事が。お待兼ねに氣が付か
なんだ。晴信の出仕にも程はあるまい。
サア、地此方へと奥深き主も家來も芳

しき。花の大紋たぶやかに。オトリ御前を。
へさして入りにけり。地言葉しがらむ。唐
糸の心も直江山城に。繋がる縁のッシ縁
傳ひ。地八つ橋か。直江様。地逢ひたか
つたと取付いて跡は詞も雙方が。抱きし
めたる障子の内。地八つ橋殿八つ橋殿と。
地呼ばはる聲にびつくりしッシ駈け入る
こなた。地山城が袂にすがれば。地これ
はしたり。あれ程女中が呼んでゐるに。
地マア、行きやと振切る袖。地エ、お前
は賤の方様。地はつと赤面直江が手元。
ちつと引寄せ顔打眺め。見ぬ唐土は知ら
ねども。此日の本を尋ねても。又とある
まい男振。地女のなづむ風俗を。地タ、キ
カ、見るたびごとに色勝る。峯の楓葉心
あらば。地たつた一言可愛というてたも
いのと、ッシ寄添ひ給へば。地ちやつと飛
退き。地イヤ御座興も事による。御前様
は誰あらう。左大臣義晴公の北の方も御

同然。殊に主人景勝へ預け置かれし御身
の上。見付けられたら一大事。地眞平御免
と立つを引止め。地スリヤどの様にいう
ても。不義はお家の堅い御法度。ム、夫
程堅い御法度を背き。八つ橋とはなぜ抱
かれてねやつた。エ、それは。サア斯う
いへば表向知らぬで済ませし昨日の供先
恩を思はぬ其方の調欲。わしが願ひの叶
はぬ代り。八つ橋と不義の様子我が君へ
申上げる。ハテ滅相な。それおつしやつ
ては二人が命。それ程怖くばわし任せに
して。地サアおちやと、ッシ無理に引張る
一間より。地不義者見付けた動くなと。
地聲あらゝかに義晴公刀押取り出で給へ
ば。續いてかけ出る北條氏時。直江が響
引掴み縁板ににじり付け。地言語道斷情
くい不義者。地縛首討つ覺悟せよと。言
ひも切らせず。地イヤなう其人に科はな
し心をかけしは自らばかり。地よきに

計らひ給はれとヌエテ覺悟の體に御大將。身が手にかくる觀念せよと。振り上げ給ふ刃の下。御ヤレ待ち給へとたをやめ御前。地賤の方を押圍ひ。御イヤ申し我が夫。一朝の怒りに其身を失ふとはよくも御存じありながら。酒に長じ色に迷ひ。善なる事も惡と見て。御成敗なされては國中に人種はござりますまい。地賤の方の不義放埒。誠と見せて實でない事。此手弱女が見ぬいて置いた。御サア打明けて給はれと。御仰せも涙のフシ顔を上げ。御御推もじの上は包むに及ばず。過ぎし頃よりお目に入り義晴公のお妾と持てはやさるゝ其内に。君のお胤を身に懐せど御怒りの色目もなく。様々の御勞り。胸に釘針刺すごとく。お志が切なさ故。如何にも知らぬ山城之助。無體な戀を言ひかけしも。不義者の名を取つて君の御手にかゝらん爲。地こらへて下され直江

殿恩と義理とに此命。捨つるは更に惜しからねどよしない腹をかりそめにも。足利の御世繼と敬はるゝ子を持ちながら。闇より闇に落すかと思へど返らぬ我が覺悟。情は却てお家の仇。一旦御不審かゝりし上は只いつ迄も不義にして。自らばかりを殺してたべ。頼み上げます。と洗ひ上げたる心の實。フシ眞實見えてうなうては叶ふまじさりながら。我が胤を懐しながら今死んでは。いよゝたをやめに義理立たず。髪は剃らねど尼法師我が愛著も是限り。身をば大事に平産せよと。打つてかへたる御仰せ落付く賤の方々も。今こそ晴るゝ悦びは。産まぬ前から若殿のフシ安産ありし心地せり。かゝる折から取次の侍罷出で。西國方の武士と申し御献上物持參致し。次に控へ罷在る通し申さんやと伺へば。御献上

とあれば苦しうない。早く通せと氏時が。下知の詞に賤の方。フシ直江引連れ立ち給ふ。待つ間程なく白洲の内。袴の肩もきつとせし眼中鏡き術ある人相。何か白木の臺の物恭しくもさし置きて恐れ。フシ入りてぞ平伏す。御ヤアいつに見馴れぬ其方が。我が君に御献上とて怪しき一品。まづ汝が生國は何國。假名如何にと尋ぬる氏時。ハア某は井上新左衛門と申して。即ち生國は薩州種が島の住人なりしが。故あつて浪人致し。何卒昔に立返らんと。心ばかりは逸れども頼むべき主君もなく。無念の年月を送る所に。不思議にも此。賜我が手に入りしは。天道未だ捨てざる所。誰彼と申さんより。恐れ多くも義晴公を主君と仰ぎ奉らば武士の面目は過ぎじと罷登りし新左衛門。君命じて召す時は。駕を待たずして行くと申せば。憚りも頼みす召に應じて御前

へ推參。執成願ひ奉ると。ツシ頭を下げて述べにける。大將一々聞し召し。個性根を見込み召使ふ筋もあらん。シテ其方が持參の物。如何なる益に用ゆるや語れ聞かんと仰せある。ハア是れこそ異國において鐵砲と異名を呼び。玉を仕込んで放す音。雷霆の如く當る事速かにて。戦ひに用ひる第一の兵器なりしと聞いたる計り。未だ此地にて見ざりし所。即ち先月六日の夜。雄烈しき難風吹起し。大船小船いふに及ばず。中にも。唐船と相見え。種が島の浦にて破損せしが。濱邊に残りし此鐵砲。持參致せし奉公始め。今より是を手本として。戰場にて用ひ給はゞ敵は残らず。鏖。ホ、左程の徳ありといへど用ゆる事を知らざれば。取得ざるも同じ事さいふ汝が其鐵砲遣ひ様存じてをらば。我が目通で傳授せよ。早く〜と義晴の。仰せにはつと新左衛門。オッリ辭

する。色なく手に取上げ。君に向ふは憚りあり。不禮は御免と立直り態と後を見せたる手の内。コレ〜御覽ぜ。斯くも構へし火蓋の所。さす敵と見るならば。まつかうあれと引鐵にどうど響きし大藥。狙ひ外さぬ義晴公うんとはかりに息絶えたり。是はと驚く諸大名。ソレ通すなと下知に連れ。取りまく家來を事もせず雍り立てたる鐵砲の。手竝に恐れフシ寄付かねば。地夫の敵と北の方。てうど打つたる長刀の刃背をけつて蹴上ぐれば。透さず付入る石突にて落ちたる鐵砲見やりもせず。巧みも深き抜井戸へフシ飛込む跡は亂口。同心亂さぬ手弱女御前。アッ君の亡骸奥の間へ。敵の詮議は此鐵砲。逃隠るとも遠くは行かじ四門を固めて取逃がさぬ。地手管を定め知らせの鐘。フシ氏時早うとかひく〜しく。仰せ受次

に連れたる御殿の内。法螺貝太鼓に手を合し。ナホス提燈松明一時に。四方八方圍みしは。オッリ通れがたなき。フシ有様なり。地かゝる騒ぎの奥庭より目ばかり出した大男。賤の方を引立出で。駆行く後に三郎景勝。聞曲者待てと。地呼ははる聲。心得眉間に打込む手裏劍。遁るゝ曲者強氣の三郎。無銘なれども小柄の手裏劍。是を證據に一詮議と。フシ逸足出して追つて行く。地襖をさつと武田晴信。君の大事と心も空勢ひ込んでかけ來れば。引續いて確契の僧長尾入道謙信。只今上洛仕ると。不和なる中は物をも言はず。かけ入らんとする一間より。地氏時向うに立塞がり。聞在番の武田晴信。君御落命の場處へは參りもせず。納め過ぎた出仕頼めつたに奥へは通さぬ〜。謙信ととも左のごとく子故にかゝる身の疑ひ。行方知れざる三郎が脱捨て置きし素袍の烏帽

子。御殿に置くは武士の穢れ焼捨てて仕舞やれと。地わくる詞も一物二物三方論議の折からに。北の方たをやめ御前鐵砲携へ出で給へば。フシ皆々敬ひ奉る。聞珍らしや謙信思ひ寄らざる我が君の御最期より。總て疑ひかゝるといへど。取分けて武田長尾は兩執權。天下の政道も執行ふ身を以て。久々上落せざりし越度。又大膳太夫晴信は今日に限つて出仕の怠り。日頃の不和も我が君を人知れず害せん。と。疑ひかゝる兩人を其儘に差置いては。女ながらも身の誤り心に覺えないにもせよ。此場の大事に外れし不運。自らは元より諸大名の疑ひ暗らす思案が第一。源家の忠臣土佐坊昌俊。偽りに誓紙を書き誠を見せたる七枚起請。それは誰しも間々ある習ひ。是はそれに事かはり。本心曇らぬ胸の鏡。磨き立てたる證がなうては身の上の曇晴れず。家を立てうと立

てまいと面々の返答次第。サア／＼何と北の方。地彼方此方を思ひやり。わつと泣きたい所をも泣かぬはさすが大將の。フシ奥ゆかしくぞ見えにける。地理の當然にさしもの二人。下ぐる額の皺よりも。肩に寄る浪胸に満ち。フシ暫し詞もなかりしが。地何思ひけん武田晴信。すんど立つてかたへなる。紅梅一枝はつしと切れば。謙信も劣らじと烏帽子の真中さつと切り。御返答申すも恐れながら。詞昔が今に至るまで。悪事に興し家國を望み。叛逆無道の名を取るも。子孫に残さん爲ばかり。地それに引きかへ某が胸中。花物いはねどまつその如く。一子勝頼が首討つて御覽に入るゝが身の言譯。聞ホ、ホ謙信とても斯くの通り。悴景勝が行方を尋ね善惡たりとも首討つて。御渡し申す證據の烏帽子。勝頼にも。景勝にも。心を残さぬ我々が。北の方への申譯。地

此上にも御批判あらば。仰せ聞けられ下されと。雙方詞かはさねど割符をフシ合せし忠義と忠義。地たをやめ御前涙ながら。聞ヲ、心底見えた此二品。地かけがへもなき兩家の繼木。花を惜まぬ心の誓言。是に上こそ事あらうか。聞其所存を見る上は。最早勝頼景勝を殺すまでも及ぶまじ。猶此後は自らが力と頼む晴信謙信。此鐵砲こそ詮議の種。あつばれ敵を討ち畢せ。君の御無念晴してたも。ハ、ハ、ハ、發明なれどもさすがは女儀。當座遁れを誠と思ひ。殺すなどは不覺不覺。餘人は格別此氏時。いかにしても吞込まぬ。花と烏帽子に誓へし悴。地ぜひ首討つて出すべしと。何がな支ゆる邪智倭奸。たをやめ暫しと留め給ひ。聞諸大名の鑑ともなるべき古老の臣。一旦番ひし詞は金鏡。などが偽りあるべきぞ。偽り飾る所存ならば。其儘にて歸さうや

地さりながら。假令潔白立つるとても。我が君の三回忌追善供養終るまでは。蟲蠅の命さへ。夫の爲には助けもする。詞況や科なき二人の命。殺す基も敵の行へ何卒三年がその内に尋ね出さば助ける二人。それも叶はぬ物ならば。討つて出すも世の掟。我が身の掟は此通りと。二世と兼ねたる黒髪を。フシ根よりふつつと押切り給へば。晴信烏帽子かなぐり捨て。君の一字を謀る某。姿ばかりは主君の供と差添抜いて髻拂ひ。鬚形を變ゆれば名も改め。今より武田入道信玄と法名し。地心は變らぬ以前の晴信。忠義に忠義を重ねしと思ひ込んだる。一生の浮沈。膽にこたへし敵の在所。雲の裏に隠るゝとも。天地の間は猿屋の内。御心慮安く思召せと我が子の命黒髪も。切つて捨てたる勇僧の其名も。武田信玄とフシ云傳へしも理なり。地氏時ほとんど笑盡

に入り。四ホ、左程の性根を見せずんば謙信晴信とはいはれまい。敵の在所知るまで我は都に押止まり君の亡骸とり納め政道糺す身が役目。よもや遠背はあるまいと。地己が悪事を白洲の内。身の誤りに山城之助。しをくとして手をつかへ。四賤の方を奪はれし我等が越度故。主人景勝へ疑ひ掛りし申譯と。地刀の柄に手をかくる。なう待つてたべ直江様と。八つ橋も轉び出で。四不義は二人が誤りなれば。お前ばかり殺しはせぬ。地わしも俱にと死覚悟。謙信聲かけぐつと腕付け。四八つ橋と不義の様子。悴が方より聞かやいな勘當と申置きたれば。主従でもないうぬらがむだ腹。五十百切つたてかゝる大事の爲にならんや。うろたへをらば逆磔。兩人共に出てうせいと。地口と心は裏表情の勘當。フシありがた涙。地早や退出と長尾入道。四君を害せ

し面體は知らねども。惡逆千里に響かせし此鐵砲こそ四人同然。某きつと預り置き詮議の工夫は胸にあり。先づ夫まではおさらばと鐵砲投げ立上れば。地信玄も袷袖に禮儀は述べても顔と顔。不和なる良將勇將の中を隔つる北條氏時。底意を見抜く北の方浮む涙も手向。の水別れ。オッ／＼て。フシ歸りける。地夫婦も返らぬ御殿の名残。是非もフシなく立出づる。地村上左衛門義清横田兵内諸共に。手の者引具し立塞がり。四ヤアどこへ義清が心をかけたる其女。此方へ渡さばよし異議に及ぶと目に物見せん。何と何とと呼ばはつたり。ヤア怖くもない義清風。如何様に吹かしても身動きさせぬ大事の女房。主君もなければ遠慮もない。地指でもさへば撫切と。八つ橋かこうてフシ突立つたり。地物な言はせを討取れと拔連れく切つてかゝるを事とせせず。

第二

夫婦諸共抜合せ。切立てられて村上左衛門命が大事と逃行く跡。打合ひ切合ふ刀の光。電光石火の間もなく確立てく。

三、五、確立つれば、残る大勢立つ足なく頭割られて血は瀧つせ。逃廻るのを横なぐり。兵内透さす後から。直江やらぬと切る刀。地ひらりと外せば思はずも。家

來を袈裟に切付けたり。これはと驚く兵内が。首と胴との生別れ。フシ心地よかりしこともなり。邪魔は拂ひし嬉しやと。フシ悦び歎きの數々も。思ひは七重。八

つ橋が渡りを得たる女夫連。合サア此上は賤の方。再び廻り近江路や敵もいつかは美濃尾張果は。駿河の富士よりも。名

高き君の御最期を悔めど更に甲斐越後。不和なる中もみちのくの直なる直江山城夫婦忠義は代々に岩清水。清き流れの木曾川や夜半に。紛れて出でて行く

思みは四方に隠れなき。下諏訪の神垣は下照姫の御神にて。靈驗あらたましま

ます故近國の貴賤歩みを運ぶ賑ひに。巫女が小鼓神樂歌神慮もさぞと知られける。殊に今日は卯月の初め御神事の宵宮とて。商人百姓草刈の小童までお千度

お百度絶間なき。フシ中に。車つかひの饗作。馬場前に車引捨て立寄つて。ホウ皆近在の知つた者ども太郎よ丑松よ

能う参つたな。ヲ、饗作遅かつたさればおれも上諏訪まで。油粕つけて行つて草臥れ果てた。ちつと休んで跡から往のと。

神前の大石に。腰をかくればコレく。饗作。其石は明神様の力石として其石に腰をかくれば其靈い石を上げねばならぬ。サアさうぢやげなければ神は見通し見て見ぬふり。そんなら休んで下向し

や後に逢はうと。フシ別れ行く。同じ車遣ひの悪者ども。宵宮参りに肩臂を。いかつ聲でコリヤ饗作。廻りや此神

前の。力石の事知つて居るか。ぼんにさうぢやたつた今も子供等がいうたけれど。あんまりしんどうさに忘れてひよつと。イヤ忘れたとは言はれまい。昔から

當社の習はし。腰をかくれば叶はぬ饗作。ナア勘八九介。ヲ、櫛六がいふ通り其石上げい。上げにや宮へ斷つて。明神様の

お神酒代を上げるか。サアく。やと石の手詰に饗作が。知らつて居ながらおれが鹿相。二人三人かゝつたとて地

故もならぬ力石。どうぞ皆が沙汰なしに下内で。イヤ濟されぬ。上げねば宮へ引すつて行く。ヲ、さうぢやく。日頃から女たらしで。生じらけたしやつ面踏みにじつてこませいサア立て。動けと兩手を引つぱりせちがふ折から。武田家の奥

家老板垣兵部。供人引連れ参詣に。此體こてい見るより家來どもに引分けさせ。調始終の様子聞いたるが社法を背きし不届とな。併ながら慈悲第一の御神なれば。法に行ふにも及ぶまじ。爰は身どもが装作とやらんに成り代つての詫。コリヤ若い者ども侍が詞を下げる簡してとらせやいサアお侍の詫なれば。了簡したいものなれど宮の掟が。サア其處があるによつての詫。身は信玄の家來畢竟わいらは装作が訴まを人なれば。我が領分へ連歸つて訴人の科にきつと行ふ。サア何と了簡するか否といへば言分いひぶんありと。氣色きしきかはれば三人がア、申し〜。調夫程に仰うやしやる事ならお宮守みやまもりへは沙汰なしと。言いふに悦ぶ装作何方様か存せぬに。お詫なされて下されて有難う存じますと。手を合はすれば。調ヲ、禮には及ばぬ其代りに。其方へ少頼ちとみたい事がある。旅宿ま

で来てくれまいか。是は〜由縁かゝりもない私お詫なされ下されて忝かたじけなくい縦へさうなくともお侍のお頼み。身に叶うた事ならば御用の仔細此處にて仰せ下さりませ。ヲ、それは過分あやまりながら。こゝは社内参詣も多ければ。身が旅宿へ同道して。密々ひそひそに咄うたしたい事によらば隙取ひまどりうさう心得て大儀ながら歩んでくれうか。何がさて何所どこまでも。来てくれうや。重疊かさね重疊。家來共装作を同道せいと。報たま養して板垣兵部いんげんべいぶヲ旅宿をさして。立歸る。調エ、装作めをゆすつて。酒買はさうと思うたに。いはれぬお侍が挨拶で骨折損こつせつ。もう此上はやけの勘八かんぱち權六ごんろく九介くすけも鳥居前とりまへで目で一杯やりかけうサアさ來い。地ち〜と鼻唄で。オツおつ鳥居とりのへ前まへへと急ぎ行く。地夕暮ゆふぐ時は。参詣さんぎの人も途絶とつたえて神前の。御燈ごとうの光森々ひかりと本もと神寂かみじやくび渡る其景色そのけしき。年も漸はう十七じちか破竹やちく草履くさぢも足輕

に小オツこおつ見ゆる。所體ところたもぼつとり風。武田の腰元濡衣こしほが何か願ねがひは鳥居とりよりオツおつかざす。袖そでに數取かずとつてヲお百度ひゃくど参り大幣おほなひもヲ引手ひきでに。神かみや靡なくらん跡あとから憎い風俗ふうぞくの。地大道ちだうだはたかる鳥居先とりまへ。信心しんじんしら砂踏すなふみ付けた懐手なつかしして神参り。調姉さん能おねう参らんすのおれも明神あきかみせぶりに來たお百度ひゃくどの連つらなりやんしよ。是はマア〜どなたか知らぬが。幸さいひな道運みちうんもう日も暮れかゝつて。女一人は心細い。さうであろ〜。地自體ちじたいマア日暮ひぐから。大膽おほだんな街妻つま様さまぢや。マア一度鳥居とりから百度ひゃくどは大儀いとて大事だいじの願ねがい。身を懲おこらさいで好よいのか。ム、身をこらすとは戀こひである。イエ〜そんな事ぢやない。それなれば好よい著物あはせが欲しいといふ願ねがではないかや。何をわつけない事ばかり。さうおしやんすお前まへの願ねがわえ。おれが願ねがは商賣しょうばいの四

つぼ。此間腐り續け。さしばつかりになつたから思付きの百度参り。如何様姉様の足の輕さは。よく〜の願ひと見えた。コリヤ連立たるゝものぢやない。其様に歩かしやるので。ア、好もしい股の邊がすれませう。マアそろ〜歩いておれが言ふ事を聞かつしやれ。色事でなくば。おれとはどうぢやア、甘い腰付ぢやと。とんと叩けば。悪魔をさして貰ふまい。耳にお百度に。悪魔をさして貰ふまい。耳に諸の不淨を聞いて心に諸の不淨を聞かず。祓ひ給へ清めて給へと。手水。コリヤけうとい神道つかひ。堅い所が奥ゆかしい。コレ神様は粹ぢや。ついちよこ〜と叶へ給へ磨き給へ。オトシはオトシと信を取つて祈る功德の神よりは。跡から口説く神様も。フッぽつと草臥れ。フツツ待つたり。ヲ、しんどや〜佛の顔さへ三度といふに。神様のお百度は。

足も腰も抜け果てた。ちつと休もと大石に。腰をかくれば濡衣は。一心不亂。顔。横臈へ立寄つて。コレ何とさ。是で丁度お百度の。數も大方禰を幣。しやつた姉様。サイナ私がお百度は大事大願成就なし給へと。伏拜み引く鈴の綱の〜お主様の命乞。鈴の綱の切れたの



は。お命の無いと云ふ。明神様の知らせかと。地涙ぐめば。詞エ、氣の弱い。さすがは女子と。地鈴の綱手に取上げ。こなたの命乞するお主は男か女かアイ殿達でござんす。それなら吉左右。此鈴の綱に書いてあるは。十七歳の男子。息災延命とあるからは神も納受。それはマア〜嬉しや。お主のお年も丁度十七。ヲヲよし〜。此鈴の綱持ていんで戴かさしやれ。ア、成程好いお方にお目にかゝつて。お命乞の願成就。重ねて御縁もあるならばこのお禮。神に願ひの甲斐の國と。地詞残して鈴の綱押戴いて濡衣は。嬉しさ足も地に著かず。フシ悦び勇み立歸る。地横藏は跡見送り。地餘所はない命でさへ神の納受で生きるのに。生きる事はさて置き。胴取りやくさる。張ればかかれる。もう今夜の資本がない。是からは明神様をおれが仲間の胴頭ににして。此

箱の賽鏡を胴鏡。マア試みに神様を相手にして。三つぼの廻りして見ようと。地ぐわりりと打明け。興オ、さくで是程あれば。今夜の資本は樂々サアマア神様か

ら振らしやませと。地張るも投げるも我一人。三つぼの賽をめぐつたばり。地おつと神の四苦八苦。一雁は立棒で受けます。是からおれが親の番。サア〜神様



張らしやませ。ハ、アひり十にねだ切お
出でか。こゝを一番當てたいが。南無骸
子明神なり給へ當り給へと地ぼいと投ぐ
ればでつくの一。サア仕てやつたと攫
へる賽錢。阿神様も一文無。是からは拜
殿燈籠神樂太鼓。なんなりと抵當を見ね
ば錢貸さぬ。縦へ貸しても。正直を重に
する神様なれば。よもや無沙汰は打たし
やるまい。負けたと思つて神腹を立てさ
しやんな。全く我等暗骰子は遣やせぬ。
イヤはやどういうたとして返答一つ打たし
やれぬ。結構な神様と。地錢のありたけ
財布へねち込み。コレ盗みやせぬ。相
對づくで勝つた錢。勝ちついでに何なり
と。地せしめてくれんと邊うそ。怒
まなごの眼に見付ける太刀。是幸ひの一資本と。
拜殿に駆け上り。潜の鐵物捻切りく。
己がせしめる奉納の。太刀脇挟み駈出す
向うへ。長尾の家來落合藤馬。供人引連

れ追取り廻し。阿ノリ最前より貌ふ所。御
主人の奉納の太刀。盜取るには仔細ぞあ
らん。白狀せんと飛びかゝるを。引
つばづして扱手も見せず。首はころりと
落合藤馬。スハ狼藉と取りまく家來。博
奕打には似合はぬ横藏難立てく。フシ追
うて行く。折から出合ふ長尾三郎。人
音太刀音心得すと。阿貌ふ足元落ちたる
首。御燈の光に能く見れば。家來落合藤
馬が首。ハツト驚き邊を見廻し。思案廻
らす横藏は。血刀提げ立歸り。心がかかり
は以前の首。後日の邪魔と暗がりを。探
せば景勝聲をかけ。汝が尋ねる心り一
品。今神前で某が。拾ひ取つてコレこゝ
にと。地差出す首を見て悔り。返答一句
も先へは出でず。跡に家來がばらくく
く。奉納の御太刀を盗み落合殿まで
殺せし曲者。最早遁れぬ百年目腕を廻せ
とフシ追取りまく。阿待てく者ども。

眼前の家來の敵身が手にかげんと地社燈
の光。顔つくくんと打守り。落合藤馬
が首討つたる手の中。多勢を相手に薄手
も負はぬ力量を持ちながら。盜賊と聲を
かけられ刀を投出し。誤り入つたる面付
は。まんざら理非の辨ない奴でもない。
こりやおのれ出来心ぢやな武士の家來を
手にかげし憎い盜賊。只今成敗するやつ
なれども命は助けた。エ、すりや御赦免
下さるか。ヲ、長尾三郎景勝。身が
手を下して討つべき首は。天が下につ
か二つ。汝ごときに目はかけぬ。此社に
一七日參籠の大願。未だ満てざる内なれ
ば一命を差赦す。餘人にかやうの狼藉せ
ば忽ち絶命。面魂に見所ある奴。性根
を改め。其首の胸に付いてあるやうに。
慎みをと地和らかに。生れ付いたる大
名風。供人引連れ悠々と心。フシ残して
立歸る。阿ア、ひやいな事。命一つ拾う

た。是から博奕場へ行ったとも。此ぶまんでは埒が明くまい。一服喫んでいんでこそと、地力石に腰掛掛け。地摺火燈取出し信濃煙草をすつぱく。すつぱの車遣者どもや〜と社内に入り横藏を取廻し。問わりや此力石の法知つて居るか。ヲ、知つてゐる。此石を上げる覚えがあつて。腰かけたが何とすりや。ハ、く〜く〜己に千手観音の手があつてもならぬ〜。石はさて置き。おいらが相手になつて見よと兩方より。地小腕取ればぐつと捻上げ。問あまい事すなやいと。右と左へ踏みのけ蹴のけ。後へ取付く勘八が。首筋掴んで引廻し。地宙に提げ二人が中へ人碌。こりやたまらぬと三人が。面も體も砂まぶれ。フシはふく〜逃げて立歸る。問エ、弱い奴等。力石々と仰山にぬかせども。手程な此小石。まつと居つたら上げるのを見せうにと。地兩手にひん抱

きかる〜と。ぐつと上げたる石の下。穴を穿つてぬつと出る。白髪交りの有髪の老人身には菅蓑異相の體。さしもの横藏きよつとして。下界の人か仙人かとし顔を眺むるばかりなり。問若者力量見届けた。此一巻に血判せい。ム、此地の底を住家にして。人を試す心の底。問はねど聞かねど。大望ある人と見た。品によつたら頼まれませうが。此横藏も其許様の器量を見立て。頼みたい事がござります。ホ、ウ小賢しくも申したり。主従は一體。主は家來を頼み。家來は主を頼む習ひ。汝が頼みの仔細は如何に。地即ち是にと懐中より。一巻を取り出し。問老人は血判がして貰ひたい。ハテ思ひ合つた頼みぢやな。汝も。御邊も變らぬ大望。身は其方を家來にする氣。身どもは御邊を家來にする氣。どちらへどうとも決せぬ中は。胸中を卷込んだ此一巻。滅多に

は打明けられぬ。此方とても此胸の中。開かぬ中に。返事が聞きたい。身が返答より其方が。住所は何國ソレ聞きたい。イヤ只野山を住家とすれば。住所とは定らず。留まる所は天が下。ム、面白い。よし所在は聞かずとも。一旦我が日にかつた上は。雲の裏でも尋ね探し。味方に付けるは折があらう。天が下を志す汝が望みも。某と同腹同性。我も定めぬ旅の空。志す方は六十餘州雨宿する天が下。人目を凌ぐ雨具をくれんと。地著たる菅蓑ぬぎ取つて。問七重八重。花は咲けども山吹の。みの一つだになきぞ悲しき。重ねて逢はうと。フシ投げやれば。問ム、天明餞別。受けました。手前も寸志の置土産。返辨申すと力石。地ぐつと引上げ投付くれば心得たりと受留めて。問隨に落手仕る。ホ、ウ御邊の力量も試み申して。先づ安堵。再會々々。地再會するは

此鏡を。調印に逢ふは。七重八重十府の
着裝打肩げさらば。くくと諸共に口に
はねど胸と胸。知らせ合うたる曲者ど
も別れて。こそは。三立歸る。死は武
士の常どとは常の詞と思ひ子に。今ぞか
かれる甲斐の國武田入道信玄と。身は釋
門に入りながら武門花咲く。庭の面。落
葉角助掃兵衛が。引きする箒打水に。いと
ど館はフシしめやかなり。調何と角助。何
かは知らず昨日から。一家中がひそく
と夜の日も寝ずに走り廻る。其譯は何だ
と思へば京の大將。義晴様とやらを誰と
も知らず殺したげな。それで國々の大名
衆がイヤ／＼おりや殺さぬ。知らぬとい
つて潔白を立てられたげな。そこでおら
が旦那も其潔白を立てると言つて。それ
で館が騒ぐげな。其潔白といふ物は。ど
んな物だそちや知らないか。何だ潔白を
わりや知らないか。イヤこいつ文盲な奴

ではある。潔白を立てるといふはおらが
小半酒を立てると同じ事で潔白振舞と云
つてお大名には節々ある事。おらもちよ
こく潔白喰つたが中々軽くてうまいも
の。したが鯨汁と同じ事で。當てらるゝ
と命がないわいらも命が惜しいなら。誰
が潔白を立てべいと。必す喰ふなど
フシ物識自慢とつても付かぬ下々の。咄も
物の知らせかと戻りかゝりし濡衣が。聞
いて案じる胸撫でおろし。調コレく二
人の衆。下としてお上の取沙汰。わし
が聞いては大事なけれど。若し侍衆の耳
へ入つたらこなた衆の爲にならぬぞ。掃
除が済んだら勝手へござれと。聞聞いて
悔り。頭かく助とちめんぼう。おらは何
にも白洲をはく兵衛。フシ箒かたげて逃
げて行く。よしなき事に隙取りし。さ
ぞ奥様のお待ちかね。濡衣只今歸りし
と一間に向ひ。おとなふ聲。調ヲ、濡衣

かさぞ苦勞と。フシ障子開いで。常磐井
御前。思ひなき身の思ひ子を。フシ思ひ
侘びたる御氣色。濡衣此方に手をつか
へ。調上々様に苦はないものと。思ひの
外勝頼様のお身の上。降つて湧いたる御
災難お案じは。理。達者なお身でもあ
る事か。お目の悪い若殿様。もしもの事
があるならばと。思へば身も世もあられ
ぬ悲しみ。悲しい時の神祈りと諏訪明
神へ参りしも。今度の御難儀免れさせた
び給へと。重き願ひも叶はぬ苦か。切れ
て落ちたる鈴の綱。思はずはつと取上げ
て。調よく見れば勝頼様の。お年に
違はぬ命の釣緒。十七歳の男息災延命と。
書いてありしも神のお告と。嬉しさ餘
る鈴の綱。は見給へと取出し。見せるも
見るも打荒爾。ヲ、それは嬉しや悦ばし
や。切れて落ちしも和女の眞實。神も納
受まし／＼て勝頼が身にさゝはらない。

諏訪明神の御神託、調是につけても京都の武將義晴公。何者とも知れず飛道具を以て害せしより。諸國の大名心區々。調我人心疑ひ合ふ。中にも夫信玄に疑ひかゝる身の言譚。一子を切つて出すべしと。契約ありしは武士の意地。調されども御前のお情にて。君三回忌の其中に。敵の在所知るゝならば勝頼も助けよと。深き恵みの立つ月日。早や三回忌も事済めど。今に於て敵も知れず。調今日に縮まる我が子の命。何とせん方なき中に。調ナウ持つべき者は忠義の家來。板垣兵部我を招き。お氣遣ひし給ふな勝頼公に寸分違はぬ御身代り。兵部が存じて罷在れば今日中に連れ歸らんと。館を出でしが妾が樂しみ。調それ故兵部の歸りを待てども。昨日にも昨夕にも。今に於ていなせのないが。心掛りにありつれど。調神のお告に何疑ひ。兵部の歸りも頓てであらう。

調そちも楽しな濡衣と。フシ御悦びの折からに。調お側仕が手をついて。調御上使として村上義清様お越なりと。調聞いて奥方涙ながら。調早や上使のお入とや。心當の兵部も戻らず。ハアイヤこれ濡衣。和女は次へ往て休息しや。上使への返答は。自らが胸にある。サアいきや。ハテ立ちやいのと。調仰せに否とも濡衣が。フシ是非なく一間へ行く跡へ。調のつさのつさと入來る。上使は聞ゆる村上義清。疊さほりも荒くれ武士。いかつがましく座に直る。調奥方遙に手をつかへ。調甲斐と信濃は國並び。其信濃にござつた村上殿。今は遙々都より御上使とは御苦勞と。調いふに村上打點頭き。調成程以前は隣國の道心安う致せしが。夫は内證。只今は上使の役目。仔細申すに及ばず信玄とくと合點の趣。勝頼の首お渡しなされ受取らんと。事もなげなる上使の權柄。

成程其儀は夫信玄わらはに申付け置きし故。兼て覺悟はしながらも今はの際に是がマア。悲しうなうて何とせう。親子此世の一世の別れ。心用意も致させたい。調ヤア首討つに何の用意。手間隙なしの無雜作に。拙者がたつた一打と。調立上るを押留め。調斯様申さば武士の。身にあるまじき卑怯者未練者とも思さうが。何を包まん勝頼は諏訪明神の申子にて。神に御苦勞かけ奉り。儲けし子なれば私に殺すも神へ恐れあり。勝頼が命元へ戻し奉ると。諏訪明神へ代參を立てたれば。調せめてそれが歸るまで暫くお待ち下されかし。調ヤアあまぢや。其代參何時戻らうやら知れざるを。べん／＼だらりと待つ事ならぬ。調イヤさのみ夫程隣取るまじ。遅うて今日暮までは。ヤア此永の日を待つ事叶はぬ。然らば未の上刻迄。夫も叶はぬをそれならせめて二時の。

地容赦は武士の情ぞや。調ハテ雑魚鬪を直切る様に何のかのとどびつこい。夫程延べてほしくば暫しの容赦はしてくれんと。フシ庭に飛下り。地垣根の権引ききしつて床の間の。花生へ捻込み押込み。調コレ此種の姿む迄は宥免致す。花が委むとそれが寂滅。いやと言はさぬ刺符の一本先づそれ迄は奥で休息。御馳走には信濃蕎麥お手打が我等好物。花經より勝頼の首。早く賞翫致したい。イザ奥の間へ案内と。地いふに否とも権の。日影待つ間の命ぞと。思へば胸もいた垣が。早う戻つてくれかしとそれを心の力草。村上を誘うてオクリ一間へ。へこそは入りける。地始終の様子物陰に聞いて扶も濡衣が。今は恨みを権に。いはん方なき憂身やとヌエ聲をも立てず忍び泣き。洩れ隔てたる唐紙を明けても明かぬ目なし鳥。無慚なりける姿にも。武士の角立つ前

髪オクリ袴の裾も長廊下。探る刀の手前さへ。面目もなき其風情。ナウ勝頼様かおいとしやとフシ縄り付いて泣居たる。調一筋な女氣に悲しいは道理々々。只因果なる我が身の上。地たま〜弓馬の家に生れ弓矢打物取る事さへ。叶はぬ不具となり下り此儘無念な死をせんより。侍らしう腹切るが弓矢神への身の言譯。此頃母の物語其時覺悟は極めて居れど。不具になつても子の命助けたい思召す。母上のお心遣ひ無下になすが勿體なさに。今まで命延はれども。調今村上が使者の様子。聞いてはどうも生きては居られぬ。地目かいの見えぬ勝頼を。大事に思うて長々の世話。いかい苦勞をしてたもつたフシ嬉しいとも過分とも。地禮は未

日からお姿を。可愛らしいと思うたが。縁と因果の初めにて。お主様とも御主人とも。辨へ知らぬ拙い筆に。心のたけを岩本。の。キ神の結ぶのお情に。嬉しい枕を交した時。未來までもと仰有つた。調其お詞が誓紙ぞと楽しんで居るもの。お前ばかり死なうとは惨いつれない胸慥と我が身をとんと勝頼の。膝にフシ打臥し泣沈む。調ア、其恨みは尤もなれど。親の許さぬいたづらなれば。地どうではかない花の縁。調もう權も委む時分。隙入れば恥の恥。地泣かずと其方は次へ行きやと。早や切腹と見えければ。調ア、申し〜まだ權は委みは致しませぬわいなア。生々と地今を盛のお身の上。切腹とは情ないどうぞ助ける仕様はないかと。止めても止まらずせり合ふ中へ。母は耻出でア、よう止めたもつたなる。調故前來りし使者の様子。聞いて覺悟は理

なれども。そなたを助けうばつかりに心を砕いて居るわいなう。母が心を無にするのか。ハ、アこは勿體なき御詞。彌大海に比べても及びがたなき母の大恩。さら／＼フシ無下には致さねど。權の限りの命。調隙取つては使者の手前。イヤ苦しうない大事な。そなたに寸分違はぬ身代り。慥にあると板垣が館を出でしは昨日の朝。スリヤもう戻るに間もあるまい。イヤ申し奥様。板垣殿が身代り連れてさへ歸らるれば。勝頼様のお命にさゝはりはなけれども。若し又それが違うては。それも分別して置いた濡衣をちや勝頼と不義してゐるな。エイ。イヤ呵るではない此母が。今改めて女夫にする。エ、ナリやあの賤しい私を。ヲ、賤しうても貰うても女は夫を大切に。思ふが直に氏系圖。目界の見えぬ勝頼を身に

んだ故。大事の子なれど其方に預ける。連れて此家を立退けと。思ひがけなき詞に悔り。アノ勝頼様を。合點がいたか。花がしびむと悲しい別れ。早う往け疾う往けと。いふ中若しや權の。しをれやせんと伸上り。見やる花より見る母のフシ姿しをるゝばかりなり。勝頼は氣色を正し。コハけしからぬ母人の御仰せ。死を恐れて館を出でなば。後の嘲り家の恥辱。武士の命は義によつて輕しと申す。只初めより亡き身ぞと思召し諦めて。命のお暇賜らば猶此上の母の御慈悲。お願ひ申し奉ると。命惜しまぬ健氣さに。フシいとせきくる涙を止め。スリヤ此母が是程に心を碎くに承引せず腹切るか。もう此上は留めはせぬ。汝より先へ此母が自害と差添押取れば。あわて留める濡衣に又取りすがるむさんの目病。申し母人段々誤り入りました。

詞に隨ひ此館を。スリヤ聞分けて落ちてくれるか。濡衣も其心か。アイ／＼必ず期滿遊ばされて下さりますな。ホ聞分けてさへたもれば母も嬉しい。斯ういふ中も心せく。早うと勧められ。是非なくフシ／＼も立出づれば。イヤ勝頼を落さんとはのぶとい巧み。村上が見付けたからは一寸も動さぬ爰へ引出し一討と。かけ寄る先に立塞がり。コレ／＼權のしぼまぬ中に討たうとは。ヤアしぼまぬかしぼんだか脈の上つた死人花。是でも生きるか生けて見るか。どうちやと權の花を目先へ突付け。突付けられて常磐井も何とせん方なき身ぞと。思ひ切つて突込む刀ナウ悲しや御切腹と。叫ぶ濡衣驚く母ヤレ早まつた生害と。二人左右に取付いて。前後正體なき沈む。勝頼苦しき息をつき。申し母人お詞に背きし

段。眞平御容赦下さるべし。地是までの御養育御慈おんあまのあはれ。深かりし身は盲目の淺まし

や。軍慮に秀でし家に生れ。戰場の驅引叶はず。遠矢はもとより打物は。漸う刀

を杖につき。我が家の内を探り廻る。甲斐源氏の嫡流たる。武田四郎勝頼と。言

はれる是が武士か。よくも武運に盡果つひはしと。詞思へば此身に倦うんじ果て。今日

や切腹明日や自害と。毎日々々刀を手に取上げは上げながら。地思へば深き母の

大恩。我先立ちなば亡き跡にて。嗚御歎なみごたき御物思ひ。逆さまな追善供養。受ける

不孝の勿體なく。存たもへ在りし今日只今。親子の縁も。あさがぼと共に、フシ散り行

く御名残。地ヤイ濡衣我が最期を歎かずとも。母に力を付け奉れ。地さは言へ目か

いの見えぬ身を朝夕心の樂しみに。暮した其方が胸の内不便ふびんや便べんもあるまじと。涙吞込む手負の苦しみ。見るに悲しさ滯

衣が。つい假初のお障かざりより見えぬ御目をあけ暮に。苦くるに病み給ふがおいとしく。どうぞ御日の明く様と御符御札みふりごらもあらゆ

る神跡かみせき足参りのお百度にも。叶はぬのみかお命まで今を限りとなつたるは神も佛

もない事かと涙の限り。くどき立てくどき立つれば奥方も。かゝる憂目を見まい

ため心盡した兵部さへ今に歸らぬ恨めしさ。思ふに違ちがふ憂世やと手負にひしと抱

き付き流涕。こがれ伏沈む。詞ヤア聞きたくもない世迷言よまごご早や首刎ねてくれんず

と。地刀やいばするりと拔放せば。なうコレ今が別れかと聞きえる奥方濡衣が。歎きとゞ

むを押退け突退け村上が。振上ぐる刀の下。手負は合掌はつしり立切る。フシ生

死の境。地かゝる事とも白洲の内怪しの辻駕えいさつさ。跡に續いて板垣兵部老

の心も。フセき立つ足元。詞ヤレ〜どめつさうな旦那殿。マア一里ちやマア半

里ちちや。急げ〜と息もさせず。上の諏訪から十七八里夜通しの早追。板の駕か賀

お心付はお心次第。結構さうな旦那殿。地酒手も定めし結構なお金すつかり下さり

ませと。汗拭あせぬぐふ其中に。地兵部は切戸の鑿うしつかり。詞駕代もくれう酒手も

くれう。地此方こなたへ來れと遣り過して大袈裟切。ナウ悲しやと逃出す相肩真二つ。

二人を仕止る刀の音に悔なげく驚く駕の垂たり。私

は御領分に住む百姓。博奕は打たず喧嘩は嫌ひ。成敗せいばいにあふ科はない。御赦され

て下さりませと。齒の根も合はず顛たひひる。詞ア、音高し〜御身の上に氣遣ひ

なし。地必ず騒さわぎ給ふなと座敷へ伴ひ親おや中。奥方一間を轉まり出で。ヤレ板垣か

遅おそかりしと。スエテ跡は涙に取亂す。詞ホ、さぞお待兼。併し御用の品も首尾よく調

し常磐井様とて、いへど答も泣入る母。詞
 ハテ心得ぬ御有様。何にもせよ委細の譯
 も仰有らず。泣いてござつて事済むか。
 勝頼様は何處にごさる。ヲ、其勝頼に逢
 はしてくれんとヲ首提げて立出づれば。
 詞ヤアこりや若旦那の御首。すりや早や
 御最期遂げられしか。ハア、はつと計
 りに腰も抜け。胸も張裂くうろく眼。
 拙者めが心當の事あればたとへ如何様の
 事ありとも。必ず聊爾の出来ぬ様と。申
 置いた兵部も待たず。天にも地にも懸替
 なき大事の若殿殺して仕舞ひ。泣いて済
 むか悔んで済むか。エ、言ひ甲斐なし
 とも胸怒とも。いうて返らぬ此有様。い
 たはしや残念やと拳を握り齒を噛みしめ
 スエテ五臓を絞るばかりなり。詞ヤアごく
 にも立たぬ世迷言。泣きたか緩りと跡で
 泣けと。首提げて村上はオクリ旅宿を。
 へさして立歸る。跡見送つてうろくくと

身の納りを簀作が。申しお侍様私はもう
 お暇申します。マア人に何の合點もさせ
 てござつた此屋敷。さつきにからの様子
 を聞けば。私を身代りにするのちやげな。



す。何やら好い事があるおれ次第になつ
 て居いと。無理やりに駕へ捻込み。連れ
 何所の國にか滅相な。人の首を断なし
 に切らうとは。惨い氣なお侍様。畢竟身

代りが遅なつて。間に合はなんだりやこそあまの命。ヲ、どうやら思ひなしか。首筋元が冷りする。地ヤレ／＼怖や恐ろしと。フシど、髪立てて立出づれば。同ヤア一大事を知らせ其分に歸されず。不便ながらも覺悟せよと。地切込む刀かいくゞり鏝元しつかと片手に握り。同ハテ身代りを遣うたといふではなし。正眞の首渡したを誰が知つたと何の大事。そしてマア人の命を澤山さうに。瓜か茄子切る様にお敵しあれと突放され。ヤア土ぼぜりに似ぬ不敵者。いよ／＼助け歸されずと。地又切付くれば身をかはし。無刀のあしらひ手練の切先危く見ゆる後の障子。兵部が響くつと引寄せ一刀さすが痛手に七轉八倒。こはそも如何にと常磐井御前障子さつと引明くれば。血刀さけて信玄公悠々然と立ち給へば。はつと奥方製作もフッ身をへり。下り恐れ入る。地信玄

一間をしづ／＼立出で。勝頼が長期にも出合はず。今又兵部を手にかけし某が所存の程。さぞ常磐井の不審ならん。同ヤア／＼濡衣。言付け置きし物はや／＼持て。地ハツト答も涙ながら夫の血汐に染めなす片袖。なく／＼御前へ差出せば。地信玄御手に取上げ給ひ。同十七年の春秋を。我が子と思ひ暮されし勝頼こそ。それなる兵部が實の悴。御身と我が血をわけし。悴といふはあの製作。改めて親子の對面されよと。思ひも寄らぬ詞に悔り。同スリヤ腹切つた勝頼は我が子でなく。此製作が眞實の。ヲ、其證據は此血汐と。地御佩刀の血片袖に押當て／＼押し。是見られよ此血の。外へも散らす合體せしは紛れもなき親子の血筋。同十七年以前勝頼誕生せし砌其板垣も一子を儲く。其子が面さし我が悴と似れば似る物生寫。見分け難きが彼奴が惡念。人知らぬ間に摺りかへ置き。己が悴を主人と崇め主人の胤を我が子となし。己が手にも育てずして病死と偽り。信濃の國の片邊へ一生不通にやつたる事。天眼通は得ざれども即座に知つたる此信玄憎き逆心一分だめしと思ひしが。今戰國の時に至つて。人の子を我が子とし。我が子を他家に育つるは智謀の一つと奥にも語らず。不通にやつたる其先へ我が手を廻して育てし製作。感の圖をはづさす。主となしたる己が子に自然とかゝる今日の災。因果の廻り來るとは知らず己が悴が身代りに。大恩請けし主人の子の行方を捜して連歸り。又殺さんと謀る人外め。國賊とやいはん人面獸心。地天の御罰思ひしれと扇を取つて丁々々。はつたと蹴すゑし信玄の。詞に知つたる。フッ我が子の身の上。地かゝる野心の者とも知らず。忠義一途の侍と思うたが面目ない。同それ

に付けてもこの養作信玄様の御子とは知
つてか但し知らずにか。其儀は我を育
てたる乳母が疾より物語。又父上にも是
までに忍びくゝの御対面。詞スリヤ稚い
時より百姓の。家に在りしも父御のお指
圖とは言ひながら采圖正しき武士の弓
箭の業は目にも見ず。身は鋤鉄の泥まぶ
れ。フシ憂にやつれしその姿。今改めて
親子の對面。衣類大小早やゝ持て。暫
く暫くと押留め。京都の武將義晴公敢な
く討たれ給ひしより。父を始め諸大名へ
疑ひかゝる今此時。地それ故にこそ勝頼
に。腹切らせしも父の言譯。詞いまだ立
つとも立たぬとも。知れざる中に某が又
勝頼と立歸らば。いよゝゝ疑ひ一身にと
どまり難き此館。地身を民間に育つを幸
ひ。此身此儀養作と。白洲へおりて養と
笠世に降る雨は凌げども。我が身にかゝ
る。横しぶき洩れて姿も濡衣が。始終を

聞いて覺悟の刀。隙さす止むる強氣の手
負刃物たぐつて我が腹へぐつとき立て
引廻し。ア、恐ろしきは天の照覽主人の
罰。詞信玄公の仰せ一々違はぬ我が悪心。
悴を國の守と崇めんと。子故の間に眼く
らみ。地くらみくゝ悴が眼病。藥祈念
も叶はぬ筈。勿體なくも御主人を害せん
とせし大罪人。逆襲にも行はれず大將の
御手にかゝる有難さ。詞コリヤ濡衣。此
館の御重寶。諏訪法性の御兜。今謙信の
手に入りたり。汝も信濃生れとあれば。
今の命を存らへて。何とぞ國へ立歸り。
方便を以て兜を奪取り。勝頼公へ奉らば。
親と一つでない悴。ホラ死後の言譯此上
なし。詞申し奥様。お赦しあつて此願ひお
聞届け下さらば。地生々世々の御厚恩と
伏拜んだる四苦八苦。不便と奥方濡衣引
立て。詞大悪人の兵部なれどもそれには
染まぬ勝頼が孝心。知らぬながらも親子

となりし縁あれば濡衣を親里へ返すがせ
めて手向草。詞ホ、尤もなる母人の御計
らひ。兜の事も捨置かれず今腹切つて死
したる勝頼。親と一つでない言譯。地忠
義の仕様は濡衣が心次第と死を留める。
詞にさすが死なれもせず。御意に随ひ法
性の御兜。命に代へて取返さん。詞ホ、
あつぱれ出かした此養作。猶も姿を下賤
に扮し。地義晴公を討つたる敵草をわか
つて尋ね出し。詞其時こそは勝頼と。立返
つて御對面と。フシ早や立出づれば信玄聲
かけ。詞義晴公を害せしは四海を望む叛
逆人。中々容易き敵にあらず特に手練の
飛道具。いまだ日本へ渡らぬ兵器。響へ
ていはゞまづ此通りと。地用意の鐵丸車
輪の如く投付け給へば。すかさず笠にて
ひらりと受留め。詞火に徳のある物は水
に徳なし。諸葛臥龍が工夫の地雷。火玉
飛びちる術ありとも我が方寸にも大河あ

り。何かは以て恐るべき。未だ日本へ渡らぬ鐵砲をそれこそ究竟詮議の手がかり。尋ね出すは隣の間。追付け歸り簀作が身の納りは其時々々。其常磐井に濡衣が暇申すも涙にて。物の黑白もなき夫に。似たる葛蒲や杜若。花紫の明方は。盛と見えし種も今は名のみぞ勝頼の。御手へ頓て。烏兜。花にもなせし悪業の。申しありて其名は鬼薙。因果は廻る日車に。のり此身と絶え入る兵部。不便と見やる信玄は仁あり。智ある勝頼に名残おく方女郎花。桔梗刈萱秋の野の月に。名をふる更科や信濃路。さして出でてゆく

第三

地名も山深き信濃路に。優しき花の名に呼びし此處ぞ。フシ桔梗が原とかや。甲斐と越後の領分にわけて立てたる境目の場所。秣を刈りにやつこらさ。江戸一

本きめた刀より研立鎌でぐわつさぐわさ。踏み荒したる銘々が主の威光を刈場の領。是も同じく二人連。籠に粉をフシ指荷ひ。見えて悔りのどつてう聲。イヤイヤ下司め。俺が部屋ではついに見た事もなしやつ面ども。誰に斷り此秣を刈りほした。悪く言譯ひろいだら。二人共に首が飛ぶ。盗人めらと言はせも立てず。詞ヤア下司の口から下司呼ばはりしやらくさい。忝くも甲州の主。信玄公のお馬の飼料。うぬらが知つた事でないすつこんでけつかれと。猶も引きぬく手先を捉へ。詞ヤイ此標が目に見えぬか。甲斐の領分は是より東。西は越後領分と書いてあるは。うぬらが眼にかゝらぬか。盗人というたが誤りか。何とときめ付けられ。返答こつつり後から。握り拳を二つ三つ。詞ヤア傍輩をぶたれば。後日に主君へ言譯立たぬ。

れかぶれと二人の奴。フシ挑み争ふ折こそあれ。詞兩人共に鎖まれと。フシ豎打掛の裾けはらし。高坂彈正が妻の唐織。越名彈正が女房入江。夫と指鬮に腰元ども用意の腰かけおく家老の。女房と見るより下部共。フシ別つてこそは。入江邊に心をつけ。誰ぞと思へばお殿の番藏百内。何故の争ひぞ。事によつては聞捨てられず。包ます語れと尋ねれば。詞ハイ。喧嘩の元は馬の飼料。信玄殿の家來とぬかし。此方の領地へ踏込み。刈り荒せし狼藉者。我々に見付けられ。言譯なさの摺合ひと。國が變れば心まで變ればかはる。甲斐の國はすべて盜賊はやりしと。人の噂も嘘ではないと。むつとはせしが押鎖め。執よりおのづと隔たる兩家の中。家來の

仕落は幾重にも。お詫び申す筈なれとも。只今のお詞に。すべて甲州には盜賊ありとおつしやつた。其一言が承りたい。ヲヲ唐織様とした事が何の根問に及ぶ事。もと此信濃は村上左衛門。義清殿の領地なりしが。謙信様と信玄様兩人して切取り給ひ。此所に境目の標しるし。それを知りつゝ狼藉せしは貴方の御家來。國の守の扶持人さへ是ぢやもの。ましてや町人百姓は猶以て。狼藉するは知れた事。イヤおつしやんな。標ありとは言ひながら。一つに續きし原なれば。過つて踏越えしものは。下郎の刈取る草。イ、ヤ下郎にもせよ誰にもせよ其過ちをさせまい爲。建てたる勝木は國家の禁制。花咲く木々の枝とても折取るまじと記せしを手折れば即ち落花狼藉。此領分の標に限らず。縦へ白紙に書くとても。事を制する理に等しく。是皆國の教として。掟を守るは

貴人より下々の掟とする。謙信様の思のかゝつた領地へ踏込み草一筋でも刈取つたは。國を盜むも同じ事。其儘に指置いては夫彈正の越度。女房の身として見て居られず。高坂様はともあれ私が夫彈正殿ついに一度も名を穢せし事なければ。お前の殿御と一口には。ほんに言うても下さんすな。コリヤ面白い聞所。お前の殿御が執權なら。私が夫も執權職。イエ、そりやお前の胸一つ。深い様子。は知らねども。侍衆の口辭にも。高坂様は逃彈正。こちの夫は鎗彈正。人に勝れた鎗の上手と。逃足早いお侍とは異名さへ違ふもの。まして心の内外も違ひやんすとほのめかす。イヤコレ入江様。武士の身は情によつて。引くも逃げるも軍の習ひ。ヲ、好い口な事仰しやるな。情でそんな異名を取る。武士の法がござんすかと。いはれて唐織當惑の。何と

せんかた此場の無念。廣言憎しと思へども入込んだ越度といひ。夫をさみする詞の端。聞くに辛さもいや増る。涙隠して入江様。花によそへ名に顯はし。非を改むるお前の存分。返す詞も家來の仕落。今は此儘歸るとも滿つれば缺くるの道理にて。今日のお禮は重ねてきつと。ヲ、そりや仰しやるまでもない。私が方に非太刀は受けぬ此以後主人の領分へ。つゆ程もお障りあらば。二度と赦しは致さぬと。殘す詞も針の先。眞綿に包む唐織が。立寄る所をとどむる下部。是非も涙の道筋をオリ左右へ。こそは別れ行く。爰に信州筑摩郡の邊に住む。慈悲の郭巨にも。かはらで積る年の數。オシ三十の上は漸うと二つか三つの稚子を。抱入れたる懐の。内、シ、盛りなる。冬の空。寒さを凌ぐ種ならで。ヌ、敷きの種

となりふりも。フシ茫然。として行めり。詞ハア誠や人間の吉凶は。生るゝ時の運に任すといふ。母の胎内を出でしより誕生の祝儀とて。ざゝんざゝん諷ふ悦びは。貴人高位はいふに及ばず。下萬民の我々迄も。悦びに悦びを重ねるが親子の縁。夫に引換へ其方は。僅か慈悲藏が悴と。生れ来るもそちが因果。母親の心子知らずと我が肌付くれば現なく。結ぶ榮花も夢の夢。頭是なけれど聞いてくれ。詞親として子を捨つるは。人間ならぬ境界と。笑ひし此身に廻りきて。今といふ今其方を。爰に捨置く此親が一人の母へ孝の爲。捨つれば捨ふ神佛の力を借つて成長せよ。親と思ふな子でない。思切つても切りかぬ。産の母が歎きといひ。我も不便さ身に迫れど。そちを此へば不孝となり。孝を立つればそちが難儀。理に迫りたる思ひ子を捨つる此身の孝行より。捨てら

るゝおことが孝行。憐れといはし思ふなとステ言譯。なみだ目も明かねば。そつと傍に置く土の上。上に臥したる稚児が。わつと泣出す聲に悔り抱き上げ。泣くを道理とこゝかして。岷山を越えて里へ往た。里の土産のナマス見納めと。抱きしむればすやゝ顔。流石童の氣さんじと打守りく。名は慈悲藏の慈悲もなく。今日前に捨置いて歸ると知らぬ心根を。思ひ出せば不便やといと。涙のやるせなき。詞へア我ながら誤つたり。心弱くて叶はじと。包み廻せし絹の香の。思ひは二重胸の隔もとの所へ押直せど。知らぬ子供に寝入ばな一世の別れと。繚言を。跡に残して雪國のつもる歎きと知られたり。かゝる折ふし甲斐國の執權高坂彈正時綱。供人數多引供して當所築摩の御社へ詣の道も勝木の傍件の捨兒に眼を配り。詞人音稀な街道に。捨てられし稚兒は。

犬狼の餌食は治定。見捨てるも本意ならずと。家來を止め歩みより。詞ム、最早嬰兒といふでもなく。男子と見えて氣高き癡顔。賤しからざる者の悴。何故爰に捨置きし。仔細はいかにと見廻す小袖の紵紵に。付けたる下札手に取上げ。詞何々甲州の住人山本勘助と。地讀みも終らず不思議の顔色。詞此山本勘助といふは。生國は三河の者山賤と見えて。魂は異國の韓信孔明にも劣らぬ軍者。主人豫て御懸望。かゝる亂世の其中でも。諸方に招く今日只今。此稚兒に名を記し捨てたる主こそ芳しき。勳助を味方に入る。信玄公へよき土産。詞ヤアゝ者共。身が屋敷へ連歸れと。詞詞にはつと若黨中間。フシ抱き取らんとする所。高坂殿暫くと。地聲をかけたる立派の侍。家來につかせし鐘印。長尾入道謙信が郎等。越名彈正忠政。我が領分に打通れば。高

坂は甲斐の領勝木を中に挟箱。不和なる中の兩執權。今は事こそと下部までフツ固唾を。呑んで閉居たる。阿イヤな高坂殿。只今物陰より承れば。是なる捨兒が下札に。山本勘助と書付けし故お拾ひなさるゝ御所存尤とは存すれども。見まする所雙方の領分へかゝり合せし上は。貴殿のまゝにもなりますまい。手前の主人長尾謙信。日頃望みし折に幸ひ。其姓名を書表はし爰に捨てしは某が。願うてもなき忠義の一品。貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば。彈正が首諸共。さもない中はいつかな叶はぬ。ホ、境目の論なら金輪際。拾はにやならぬ稚兒が。踏んだる足は手前の領分。イヤさにあらず。物の始を頭といへば。

足元が。肝心要の甲斐の國。高坂彈正が拾うて見せう。イ、ヤ越名彈正が連歸る。の。めいゝ夫を押隔て。高坂が妻威儀繕ひ。及ばぬ私が一思案女の差出がまし



イ、ヤならぬと刀の柄。道理を非にさせぬ詞詰め。争ひこゝに二人の女房。とくより立聞く此場の時宜。見やる眼も角菱む山本勘助。是を手筋に召抱へるお前方

の胸の内。一方へ拾はれては是非一方の國の恥。其争ひの基となり。肝心の此兒に乳も吞まます。若しもの事があつたらば。お望みも水の泡。何にもせよ兩方より。乳房含めし其時に。何れへなりとも吞付く方。夫を證にお拾ひあらばどちらにひけも劣りもないと。わしや思へども跡や先患案してたべ我が夫と。道女の智慧の海。實に高坂が、フン妻なりし。女房出かした。争ひ止むる乳房の聞取。幸ひ其方が持合せし乳を興へて試せん。彈正殿も相應な乳母でもあらば出されよと。入江に當てたる詞の端。聞くよりくわつとせき立つ入江。おかもじ様の御思案に鼻毛延した今のお詞。詞越名彈正忠政が女房。乳母奉公は致さぬぞ。今一言仰しやつたら。赦しはせぬと腹立聲。御ヤイ、馬鹿者。大事を前に置きなごら。無益の舌の根動かすな。イヤなに高

坂殿。負うた子に教へられるとやらで。内方の詞に服し女房々々が乳を勧め。どちらへなりとも方を付け。此場の別れは如何ござらう。ホ、そりや此方も望む處。吞むか吞まぬは互の運づく。唐織早くと勧められ。だくつく胸も押鎮め。抱上ぐれば目を怪つちり。明けて三つの稚兒が。わつと泣出す口の内。乳房ふくめて賺しても。フン吞む腹更に見えされば。見合す夫婦が顔と顔。コレ申し唐織様。何ぼう勧めさしやんしても。子供はどうでも正直な。わしが代ると抱き取る入江。心に拜む神よりも頼みに思ふ此乳を。たつた一口吞んでたも。ゆぶり歩けどげがな事フン納も正體泣叫ぶ。鼻をとめんと手に汗を。握り詰めたるいたいけも。憎やとすねて置く露の。頼みも綱も切れ果てし入江が思ひ唐織も。残り多さに又立寄り。フン賺し宥めて抱上

ぐれば。泣きやむ不思議女房より。高坂彈正大に悦び。詞軍師山本勘助。信玄公の御味方と。いせも立てサヤアヤアくらい。詞兩方共に吞付かねば。未だ善悪知れざる中。其方へ連歸る其譚聞かんと詰めかくる。ホ、合點行かずばよく聞かれよ。入江殿が抱上ぐれば泣くは治定あの如く身が女房が手にある中。泣かぬが縁ある是證據。又二つには甲州の住人。山本勘助とあるからは。紛ふ方なき手前の領分。最前ちらと承りしが。越後領へ指ささば。此後は赦さぬとやらナソレ。御内方の詞もあれば。是とてもまつその如く。稚れども甲州の町人其許がお構ひあらば却て狼藉國賊の。名を取らるゝか彈正殿と。先にかけてる詞の裏釘。折返されてさしもの彈正。返答せき切る女房入江。思へば無念と唐織が。抱きし稚兒無理やりに引取ればわつと泣

く。是は無體な入江様さつきの喧嘩に負けたる代り。其子ばかりは叶はぬと。あなたこそなと挑みあふ。裳ほら／＼妻と妻。顔はほのめく薄櫻亂れ散つてぞ。フシ争ふ風情。地一度にわくる夫と夫。中にも高坂聲勵まし。實にや至つて正直は頭にやどる神の慈悲。一陽の春を待つ雪中の梅にも優る。主君の悦び此身の忠義さればいな。お慈悲深い信玄様の御威勢が顯はれて。私が無念もたつた今。サア申し入江様。最前のお詞にお前の殿御を何とやら仰有つたが。今一言御所望と。嘲る女房ホ、ホ、。調聞きたくば名のつて聞けん。長尾入道謙信の郎等。越名彈正鐘彈正。イヤモ天晴手練の此鐘先。受けてはたまらぬ大事の稚兒。連れて手前は逃彈正。地唐織來れと立別る。胸に一物二人の彈正。爰に捨兒の隨一と。其名も高き山本氏伴ひ。歸るぞ。三更ゆゝしけ

れ。フシ秋の末より。地信濃路は。野山もフシ家も降り埋む。海邊雪の中なる。白髪雪。フシ女ながらも故あつて。地男のすなる名を名のる。山本勘助と人毎に。いは間の水の。スエ普たえて。木の葉の御二つ三つ年も幼氣稚兒を賺すお種が手枕に。寝兒がフシ守は何所へ往た。地山の薪をえいさつささらば爰らで一休み。詞お種女郎冷えますの。ヲ、正五郎様戸助様。吹雪で外は歩かれまい。お茶も沸いてござんす。イヤ／＼梅ふまい子持は手が放されぬ。慈悲藏殿は留守か今日も今日と寄合ふとあの人の噂。お袋への孝行は申すも愚か兄への深切。ほんの子は次にして兄貴の息子の其次郎吉を。大切にしらるゝ女夫の衆の心意氣。名も慈悲藏といふが尤も。サレバイノ。夫に又兄の横藏殿。兄弟とてあの様にも違ふものか親への不孝さ弟へのむごさ。親兄弟に

さへあれぢやもの村中で持餘すが尤も。外を家と出歩いて隣邊へたゞれ込み。人の娘下女胸當り合に孕まし。其おこもりのあの小悴も。親に似た子の鬼子である。地口はさがなき山道を。ゆがまぬ武士の梓弓胸の袋に押包み。孝を外さぬ慈悲藏が。獵漁も母の爲フシ流れに添うて立歸る。詞ヲ、孝行者お歸りか。佛性を慈悲藏殿。殺生にいられたもお袋への養ひか。夫程にさつしやつても氣に入らぬあの姿様は。さりととはきつと片意地者。ア、これ／＼勿體ないこというて下さん。縦へ身を紛に碎いても。胎内にあるから今日までの親の苦勞。くらべて見れば百分一。地あの鳩部屋の鳥でさへ。鳩に三枝の禮ありとて諸鳥に勝れて孝行な鳥。何處からとも無う此家の軒へ集つて来るも。慈悲藏が心少しは通じ。類を以て集つたかと思つて嬉しう思ひます。詞

成程夫はこちとらもさる書物で見置いて置いた。鳥は親の養ひを。育みかへすといふ本文おれが每晚女房に。孝行にする心が通じて。鳥がかあ／＼の類。いんで見ようと出でて行く。母ぢや人は最前からまだお腰みなされてか。炬燵でお風ひかしますな。お目の覚めぬ其中にお肴料理して上げん。次郎吉も腰入つたか。ハイ此子が機嫌よう育つに付けても。氣にかゝるは峰松が事。ほんに兄御の横藏様。いかに我が子でないとして捨てしまへと無理ばかり。お前が外へ出やしませんと。私を女房にせうの何のと辛い悲しい事聞くも。お前の孝行立てる爲と。辛抱するにもしられぬは。眞實な子を胸慾な餘所へやつたといはしやんすが。まあ其先は何所の誰。ハテ詞夫を問ふがもう未練。氣遣ひしやんな此貧家に置かうより。乳母に乳母を付ける結構な内へ

養子にやつた。彼奴はきつい果報者。もう思ひ出さずとんと捨てたと思つて居や。病煩といふ事もある。萬一先で死んだら無い昔ぢやと。諦めておりや居る氣ぢやと云ひながら。犬狼の餌食とも。なりはせぬかと子を思ふ心は一つ一間の中。そつと窺ひ是はさて。寝入つてござるかと思へば裏へ出て御氣丈千萬。お炬燵に火もあるか。追付け御膳の用意もしやと。片時忘れぬ孝心は。又と類は。あらし吹く昔も吹雪に高足駄。踏分け尋ね来る人は長尾三郎景勝。萬卒は求め安く一將は得難しと。此隠家の弓取を慕ひて。一人門の口。道具や二重の腰の白妙に。枝もたわゝの雪折竹。杖と我が子に助けられ。庭に佇む老女の風情。詞申し／＼此大雪にさりとては冷えまする。蒲團の上にござつてさへ御老體の身の上。平にあれへと取る手を拂ひ

詞七十に餘つて愚鈍にはなつたれど。子供に物を教へられぬすべて親に仕へるに起臥の介抱は誰もする。何事によらず親の心に背かぬ様にするのが誠の孝行。寝てばかり居るも氣詰りさに。雪の景色も見ようと思ふ。母が心を妨げるは何と不孝であるまいか。ハ、ア一々誤り奉る。其段には心付かず。お年寄られて一日一日御氣力の落ちるが悲しく。今日も獵に出で。元氣を養ふ谷川の。ます／＼お達者なる様と。志の捧物賞翫なされ下されかし。イヤ／＼物の命を取り夫が何の養ひ。眞實親の養ひなら。遠い山川の珍物より。つい裏にある竹藪の笋を掘つて来い。ハアそれは御意ではござれども。此寒の内に笋が。サアある物を取つて来るは子供でもする事。ない物を取寄するがほんの孝行。斯ういはゞ母が難題言付くと思はうが。此位の難題に困る様な

器量では智者と呼ばれて人に知らるゝ。弓取にはなれぬぞよ妾が夫は。天が下に聞えし軍師。御一生主人を取らず過去られた忘形見。兄弟の子が器量を見定める迄は。女ながらも夫の名をつけ。山本勘助と名乗る此母。二人の中に勘助といふ名を譲り。父の軍法奥義の巻を傳へうとは思へども。夫では中々勘助にはなられぬ。サア其名跡を受けたさに。心を盡す此慈悲藏。ソレ々其名がほしさに孝行を盡すは眞實の孝ではない。上皮的偽りを表裏。コレ々それはお情ない苗字を望むも出世して。母人の悦び顔拜みたいばかり。兄者人の心入と一つに思し下さるゝは。地餘りつれなき御心とラシ雪に。喰付き落涙に。老母は猶も腹立聲。詞コリヤ何ぞ利口に言廻しても。此年月膝元を離れ他國して居て。今日此頃俄の深切はが偽りといふ證據。己が心に引比べ兄を

不孝と言ひなす悪心。思へば見るもいまはしと。杖振上げて打たんとす。老のヤ／＼汝が世話は受けぬわい。地そこ退きをれと親と子の。心合はざる片足の下



力みに踏挫く駒下駄飛んでよろめく足。駒。景勝透さす拾ひ取り御召物これに候コハあぶなやと抱きとむれば。詞イヤいと。老女が前におし直しマシさまつて頭

を下げらるゝ。地母つくゝと打守り。

調人、品柄只人とも見えぬお侍。賤しい婆に服物を直されしは。黄石公に香を興へし張良が俤、ハテ地おおくゆかしき御方

や。お近付にもなつて。とくとお禮も申したい。詞コリヤ慈悲藏其方に用はない

立つて行け。ハアはつと地何か仔細はありそ海母の心を量りかね。フシ是非なく

奥に入りける。地いざ此方へと請ずれば。フシ辭する色なく座に直り。詞御推量

少しも違はず。黄石公に劣らぬ軍者。山本氏の御子息を召抱へて。一方の大將と

頼まん爲。地身不肖なれども越後の城主。長尾謙信が嫡子三郎景勝。是迄參上仕る

とエテ禮儀。正しく述べらるれば。詞復こそく。始めより自然と備はる御眼ざ

し。して御望みなさるゝは兄弟の中兄か弟か。イヤ景勝が望む處は惣領の横藏。

ハテナ最前より御覽の通り。孝行な弟慈

悲藏を差置き。不孝な兄の横藏を。御家

來になされうと仰しやるお前のお心は。イヤそりや其方に覺えある事。諏訪明神

の社内にて。面體恰好とつくりと見届け置いた横藏。是非に身どもが所望致す。

ム、左様おつしやれば思ひ當る。よくよくに思召せばこそ大名のお手づから。い

やといはさぬ此婆に。下駄を預け給ひし行なれど。此母が成り代つて御家來に差

上げう。過分々々。其箱是へと取寄せて地いかに老女。詞主従となるからは。一

命を捨てても忠義をはげむ。武士の習ひいふに及ばず。此方とても一身を任すと

いふ。かための一品受取られよ。地若し違變あらばフシ身の上たるべし。詞御念に

及ばず其時は母が鬢首差上げるか。家來にするか二つの安否。後程々々。老女。

地さらばと詞詰。威風鋭き北國武士。越

後縮の物なれて引けぬ其場の。信濃路や

オクリ別れて。へこそは歸らるゝ。地木會山木立あらくれて。無法無鞭をしにせにて

名も横藏の筋街道。草鞋のひもふり埋む餌竿。かたけてフシ門口より。地母者人今

戻りましたと。聲に老母がはやゝ顔。詞ヲ、兄待ちかねました。此間はマア何

處へ行て居やつた。ハテこな和郎は。おれが足でおれが歩くに何處へなと飛び次

第。飛びついでに戻りがけ小鳥十羽程捕らうと思つて。顔も足も切れる様な。道

理々々サ、ちやつと上りや。地く

と草鞋の紐。手づから母の慈悲藏も。足の湯を取り機嫌取る。詞兄者人お足洗ひ

ましよ。イヤコリヤ。孝行な兄が體に不孝な弟が手をさへるは穢らはしい。

母が洗つてやりましよと。地一人に辛く一人には甘い女子の鼻の先。泥駱突付け。詞エ、若い女子の手のさはるは好いもの

ちやが。乾物の様な母者の手で情の罪科
ちや。いか様おれは孝行者。此小鳥も晩
の夜食に。こな様に喰はすのちやない。

焼いて貰うておれが喰ふ氣兎角おれが口
さへ養へば。こな様の氣が休まるなう母
者人。さうともくあのマア孝行な事わ
いの。サアく炬燵に火もして置いた。

ム、こな様が今まであたつてゐて何の恩
にさせる事。エ、こりやぬるい水炬燵ち
や。イヤくあんまりきつい火は上つて
悪い。それがたはけといふ物。もうこな
たも追付け火屋へ行く體。稽古の爲にき
つい火にも當つて置かしやれ。サア足採
んで下あれと踏出す兩腕慈悲藏見かね。

ドレ私がと立寄れば又差出るか小癩者。
兄やかうかくと撫でさする奔走息子の
フシ鐵平足。ア、とてもなら美しいお種
か。峯松はどうした。ハイお指圖の通り。

思ひ切つて一昨日主が何所へやら。ム、
捨てて了うたかよい事く。一體おりや
貴様に惚れてゐる時に。幸ひと噂のそげ
めは死て了ふ。跡に残つた小悴の其次郎

吉邪魔な餓鬼めしめ殺さうかと思つたれ
ど。味なもので子といふものは親よりち
つと可愛いものちや。又大きうなつた
ら俺に似て孝行にも爲をろかと思つて。

貴様に育てさすからはナウ慈悲藏。畢竟
わがみと相合の子。とても事に女房も
相合にする合點。お種顔振らずとムンと
言やいの。それをいやと言ふと慈悲藏が
大事がる此母者に當るぞよ。コレしつか
くと揉ましやれエ、地まだ火がぬるい
と戀の意趣を。炬燵にあたる非道者。フシ
持餘してぞ見えにける。折ふし表に先

走り。岡山本勘助殿に用事あつて。大僧正
武田信玄參上なりと案内に。思ひがけ
なき夫婦が不審。仔細あらんと横藏が。

起きも直らすフシ空寝入。阿ハテ扱思ひ
寄らぬ大身のお入。卒爾には母も逢はれ
まい。慈悲藏饜せ。コレ横藏。これはし
たり。何やらいひく寝入つたさうな。

風風ひきやんと一間の障子。引立て親
ふ表より。匂ふ留木の高坂が。妻と知ら
せてうづ高き。雪の懐稚兒を抱いて。
幾重の。柴の庵。地家來は先へと追ひ返

し。行儀正しく打通る。訝しながら手
ついで。信玄公の御入と思ひの外なる
女中の御名は。ヲ、成程御不審尤も。偽
りならぬ信玄公のコレ此寝顔に對面なさ
れと。いふに女房立寄つて。ヤア峯松
が戻つたかと。飛立つばかりのフシ胸押

鎮め。是は御苦勞様や。そんなら
峯を貰うて下さりましたはお前様か。い
かいお世話様に。コレく鹿相いふまい
甲斐國へ養ふからは最早一國の世繼。即
ち今日の信玄公。孝心深き慈悲藏殿殊に

軍術の達人と聞及び。師範ともお頼みなされん爲。わざ／＼見やしやんせコレ愛らしい此信玄が抱へに來た。お受け申されてよからうと思ひをかけたる名將の情は肝に徹ゆれどとぼけた顔で。詞是はしたり。私は此在所の山賊。鋤鐵の外何にも存ぜぬ者を。軍術の師範なぞとは。勿體ない事仰しやります。コレ／＼此方の人。お前の器量を聞及んでとあるからはきつい譽な事ぢやぞえ。卑下するも事による。ハテ軍法奥義は。母様の傳授の巻を譲り請けて。さればいやい。それを貰うて山本勘助になつたれば。抱へられまゝのものでもなければ。未だ生も變へぬ中に軍術の大將のと。そりや山の芋を清焼にする様なもの。名さへ慈悲藏とて蟲さへえ踏殺さぬ者が。軍に出て人の首が。何として／＼と。取つても付かぬ顏付に。唐織はつと胸せまり。不調法な女の使

氣に入らいで仰有るのか。どうあつても味方に付いて貰はねばならぬといふ其譯は。桔梗が原に此捨兒。山本氏とある書付を。印に拾ひ取りは取つたれど。サアどうも力に及ばぬは肝心の乳に呑付かず。何ぼ抱いても突付けても。あつち／＼と指さして泣いてはつかり。此大將に兵糧がなければ命も危し。其兵糧を續ける謀は慈悲藏殿。お前の心にありさうな事。甲斐國へ味方に付いて。夫婦して守育うと思ふ心はござんせぬか。此マアちつとの間にコレ何所もかも。細つた事を見やしやんせ道理でもある。眞實の母御の懷を離れて。他人の手に何の育たう。夜はえ寝ず。蜜はうつ／＼泣寝入に。寝た顔のいぢらしさ。ほんに見る目が悲しいと。語る中より女房がヲ、可愛やさうござんせうと。わつと泣出す母親の。聲に目覺ししがみ付き縛る乳房は一人に

て。子の手拍の二面。儼ならぬこそッ恨みなれ。一間に母の聲高く。詞コリヤ／＼慈悲藏。子供を餌に恩にかけて味方にせんと。後穢い信玄に奉公しては武士が立つまいさりながら。軍法奥義も傳はらず。家の名跡を繼ぐ氣がなぐば。勝手次第と沒義道に言捨て陣子。マシはたと閉す。ハアはつと立上り。我が子を取つて引きはなし。詞須彌山滄海の大恩を受くれればとて。母の恩にはいつかな／＼信玄に仕ゆる事存じも寄らず變改申す。コリヤ女房。一旦捨てた此粹に見苦しい何ほえる。縁に引かれて知行取つては末代までの名折。親子の縁をさつぱりと切つて了へば。信玄に恩もなく義理もなし。コレ此竹も其本は。竹に雀と離れぬ中。今餌差竿となる時は。鳥の爲には怨敵。事によつたら親子兄弟。敵味方となるも武士道。お返事は此通り。稚兒

連れて、早や歸られよと。詞鏡に言放す。
河ハア此上は力なし。地とはいへ歸つて御
主人や。夫に何と詞さへ。なくく、ッ
抱き立出づる。地コレなう峯松一世の別
れせめてマア。この乳が一口呑ましたい
と慕ふ女房を引退けて。枝折戸びつしや
り。表にも心は残る雪中へ頭是。なみだ
のフシ子を抱き下し。地打掛の下ぐくり
括り添へたる後紐。垣に結ぶは義理の綱
神や捨置く竹の子笠。いたいけつむりに
打著せて。詞山本の氏を繼ぐ慈悲藏殿を。
軍衛の師と頼まんとこれまで來給ふ信玄
公。どうも此儘では歸られず。是非とも
味方に付くといふ一言を聞くまでは。此
信玄は其許の門口を立去らず。雪に凍え
て死す迄も爰に座を占め返事を待つ。大
將の命助けうと殺さうと御思案次第。よ
い返答を頼み入ると。地垂絹をかけたる
雪の笠、ッ思ひを。殘し捨てて行く。詞

ヤアそんなら坊はまだ往なぬか。コリヤ
く。門には誰もない。よし居てからがあ
かの他人。今傍へ寄るとナ。信玄の恩を
受けたになつて。母の一言反古になる。
此簀戸の外へ一寸でも出るが否や。夫婦
の縁も是限と。地腰さげの紐、鏡を括る慘
さは我ながら。いかなる惡魔鬼か蛇か。
六箱三略の望みある慈悲藏。慈悲も情も
知つては居れど。母の詞は背かれぬ。詞ど
うで乳房に離れた者とてもない命。凍え
て死なば死に次第。そちもソレ其子を袖
にしては。兄貴への義が立たぬぞ。ハア
何かに紛れて。大事の孝行怠つたり。ド
レ裏へ行て雪の中の。笥掘て進ぜうと。
地、地笠笠取つて打被さあつき親子の縁
をたつ。銀ふりかたけ。詞此寒氣に荒男
でさへ堪らぬもの。餘尺もない體に。ア
ア子を捨てる藪はあれど。地親の詞は捨
てがたき。文、裏の藪へと踏みわける。

雪より先にいとし子の埋もれ死なんか不
便やと。見合す顔に降る涙。雲争ふ。漏
翅。林掛オクリしをる。夫のナホル後影。い
かに望みがあればとて天にも地にも一人
子を。よう惨たらしう捨てられた。詞今
の女中も氣の強い。置いて往ぬ程ならお
家に癡さしていんだがよい。可愛やく
ひもじからうのに。地ちつとの間なと抱
きたいと。任せぬ辛さ次郎吉を。漸うそ
つと下に置きさし足。ホッしながら庭に下
り。地、キ覗けば門にしよんぼりと。詞ヤレ
坊よ夫がマア何と命があるものと。地明
けんとすれど鏡に。錠の代りの眞結は。
惨やつれなとあせる程。雪にしめつて聞
かぬ戸に。ちうたいくも絶えん、の風
にうたてや次郎吉が。わつと泣く聲。ハ
ア悲しやと。又かけ戻り抱上げて。サハリ
雪やころゝん蔽やころゝん。こはそも何
たる因果ぞや。この子憎いぢやなければ

も。我が子に乳が呑まされた。コレちとの間へ疎入つてたもの。心も空は。フシかきくらし。又降りしきる白雪に外に。泣く聲八寒地獄。劍を呑むより身にこたへ。思はず知らず轉びあり。碎けよ破れよの念力に。はづるゝ戸より身は先へ。コリヤぼんよゝと我が子を肌にも抱きしめ流涕。こがれ泣く聲に。唐織木蔭をつつと出で。信玄公を抱き上げ。乳房をふくめ参らすからは。慈悲藏はもはや此方の味方。夫に知らせて悦ばせんと勇んでフシ館へ立歸る。地はつとお種も心付きうろつく隙に何處より。懐劍ちやうど峯松が肝先貫き息絶えたり。コハ何事と驚く中。次郎吉を引立て横藏が。一間をさしてかけ入れば。調ム、扱は我が子の害になると横藏の所爲ぢやの。義理も情ももうこれ迄。敵を取らいで置かうかと。死骸を小脇にかい込んで。常に

は弱き女氣も恨みに強き力帯。オクリ奥へ。へ親ふ忍び足。フシ早や日も暮に。近づきて。鐘孝行の。道ぞとて。古き例の跡を追ひ。子故の間に白妙の道も。涙にフシ見えわかす。調なんぼ掘つても筈があらう様はなけれど。親を思ふ一心を憐み。天より授くる事もやと。心に込めて。一尺二尺底は白羽の鳩一羽。飛んでおりしも飼ひなれし。フシ鳥も心のあるやらんと。調又掘りかへせば又一羽。中オクリ友呼び。誘ふ生類の。有様つくく打守り。詞最早入相。諸鳥囀に歸る頃一羽ならず二羽三羽。集り来るは。ハテ心得ず。誠や。兵器ある地には鳥群をなすといへり。我が父は日本の軍師。此所にて世を去り給ふ。一生語んじ置かれたる。六韜三略の秘密の卷此下に。埋み置かれしやらん。扱は我が孝心天に通じ。鳥類是を知らせしか。調ハア有難し忝しと。心勇んで掘

穿つ。雪も散亂群雀はつと立つたる藪の中。親ふ兄が。煩魂。調ム、野に伏勢ある時は歸雁列を亂る。油斷の櫛を親ふ悪鳥。殺さうと生かさうと手の内の雀。慥に手こたへ。この下を。コリヤ待て慈悲藏。埋んである傳授の一巻汝にはやらぬ。兄が出世の種にするわい。兄者人そりやお前無理でござりましょ。サイヤイ。無理いふか兄の威光。阿呆鳥の孝行ごかし。邪魔な汝から仕舞うて取る。どつこいさうはなりませんまい。苗字を繼ぐは此慈悲藏。見事われが。繼いで見せう。調小癩な退けと鋤と鍬。落花みちんの雪と飛んで。掘出す箱の二人が争ひ。道と非道の二筋を滑つつ轉けつ。掴みあふ。はずみにがはと取落し。池にさんぶと。水煙騒ぐ群鳥兄弟も。フシカ、不思議と。見とるゝ後より。障子ぐわらりと母の老女兩人待て。調兄弟共に武士となり主人を取るべき時

節到來。雪の中の笋を掘出したる慈悲藏。
今こそ母が心に叶うた。天晴孝行出かした〜。其方は最前言付けた通り。裏口四方に氣を付けよナ合點か。ハア委細承知仕ると。驅入る弟横藏は。池中の箱を引上げてフシ母の。御前に差出せば。阿サア〜兄。そなたには別てよい主を取らする。即ち主人より下されし。装束も更めさせんと。端しづ〜奥の白藁に。無紋の上下白小袖。傍に三方九寸五分。フシ我が子の前に直し置く。訓母者人コリヤ何ちや。いやさコレ白装束は何の爲。ヲ、それこそは冥土の晴着。只今其方が首打つて。身代りに立つるのちやわいエイエ。穢相な事ばかり。此首を身代りとは。そりやママ誰が。今日其方が主人と頼みし。長尾三郎景勝公の御身代り。聞及ぶ武田信玄越後の謙信。室町の御所に於て。互に我が子の首討つて。心底を顯

はさんと契約ある由。最前そちを召抱へんとて來られし。景勝の面體そちが顔にさも似たり。扱はと母が推量違はず。箱の中に殘されし此一通に。委細の様子詳かに記されたり。主従となるからは命は君に捧げし物。武士の因果と諦めて。潔う死んでくれ。コレ〜〜よう思うても見やしやれ。いかに主ぢやとてまだ知行もくれぬ中に。殺さうといふ様な胸怒な主があるものか。イヤ〜もう此主従とんと變改。イ、ヤさうはなるまい。いつぞや諏訪の杜において殺さるゝそちが命。助け置かれし景勝の恩忘れはせまい。其時の情は今身代りに立てん爲。智謀の畏にかゝりしとは知らざるか。恩を知らねば人ではないぞよ。たとへ逃けても此家のぐるりは。景勝の家來取巻いて一寸も遁れはない。切腹するか但し母が手にかけうか。サア〜なんと〜なんとと詰

めかけられ籠中の鳥の目はうろ〜。隙を見て逃出す。膝口はつしと手裏剣にフシ尻居にとつさり詮方なく。詞是非に及ばぬもう是までと。腹切る刀取るより早く右の眼に突込んだり。流石の老母も不審顔流るゝ血を押拭ひ〜。訓母者人景勝に似たによつて身代りに立てたが。小面倒な此面に。かう疵付けて相好變へれば。もう身代りの役には立つまい。今日只今父が苗字を受繼ぐ。山本勘助晴義。軍法奥義を胸に貯へ三略の巻より大切な此命。ヤア〜謙信の家來直江山城介種綱。夫へ出でよ言ひ聞かず仔細ありと。呼ばはる聲に一間の内。見ざふと慈悲藏が。優美の骨柄。長袴フシさわやかに。詞某長尾の家臣たる事深く包んで。故郷へ歸りし其仔細。母人には密に語り。豫て申受けたる兄者人の命。現在の子を捨てたも否應いはさぬ命の無心さりなが

ら。眼を扶つて。身を全うする大丈夫の魂。あつたら勇士を殺すは残念。長く謙信に仕へ。忠勳を盡さるべしと。地言はせもあへず冷笑ひ。詞悪か。謙信づれが家來には汝等が分相應。身が主に釣合はぬ。まこと山本勘助が崇むる主人は忝くも。足利十三代の公達松壽君。是へ誘ひ申されよと。フシ詞の下に高坂が。妻の唐織次郎吉を傅き申せば。山城親子ハアはつと計り飛びしさり。フシ恐れ入つたる計りなり。眞中にどつかと直り。四ヤイ山城。只今打つたる此手裏劍は。先年室町の館にて此公達の御母。賤の方を奪ひ取り立退く折から戦勝目常に打ちかけたる我が小柄。只今我が手へ慥に落手。山本の苗字を引興さんと軍學に心をこらす處に。武田信玄大僧正姿をやつし只一人。密に庵へ來らせ給ひ。詞足利の行末、覺束なし汝我が力となつて事を謀れ



と。名將の一言心魂に徹しハ、ア畏り奉ると。即座の領承、弓矢の誓。詞ヲ、其時に此母も只人ならずと思ふたが。扱は武田信玄公と。主従の契約しやつたの。ふ時しも館の騒動。詞義晴公はあへなきヲ、サ。大魚は小池に住まず。鶴は枯木に巢をくはず。知勇兼備の大將に頼まれ申せし身の面目。直様都に馳上り。窺

御最期。地ハツアせん方なし。懐胎の賤
の方人手には渡さじと。忍び入つて御家
の。白旗諸共守り奉り。立退く館は八方
に提燈松明。ちる花の。都を跡に遠近の
雪の信濃路爰かしこ。月の更科の片山里
に。人知らず隠まふとは。さしもの母も御
存じあるまい。詞知らなんだくコレコ
レさうして御母賤の方の。在所は何所。
サ、、どうぢやく。地ハア申すも便
なき事ながら。憂き事つもる産後の惱み
はかなく此世を去り給ふ。詞跡に残りし
あの公達勿體なくも我が子と偽り。次郎
吉よくくと。呼ぶ度々の空恐ろしさ口惜
しさ。弟嫁が乳を幸ひ。我が子を捨てさ
せ。他家のあの子を養育さする我が心
底。我儘無法は一物ありと悟りし老母。
雪の中の笋を掘つて見よとは。天晴明察
實に勘助が。フシ母人ぞや。地穢れを厭ひ
今日まで。埋み置いたる雪中の笋。是に

ありと。箱押取つて差上ぐる源家正統武
將の白旗。詞神明を頭に戴く義兵の旗上
げ。謙信親子只今より此勘助が幕下に付
けと。立歸つていひ聞かせよと。地一つ

の眼に天が下見下す富士の山本勘助三國
無雙のフシ弓取なり。地山城大きに感じ
入り。詞信玄景勝不和なるも。互に心を
疑ひあふ。忠臣割符を合すが如し。君御



在家知るゝ上は、景勝公の言譯立つて。

身代りにもう及ばぬ。追付け兩家和睦の基もと成程々々最前裏で直々じきに様子を聞いた。信玄公と勤助様。言合せのある事は。一家中へもお隠しあれば。夫高坂も

露知らず。抱へに來た慈悲藏殿は。思ひも寄らぬ長尾の御家來。君の御事初めて

聞いた使つかの面目かまど。此上なしと悦びの。

中に歎きは一人の孫斯う心が解けるなら仕様もやうもあらうもの。此婆が偏

屈から。信玄方の恩受けては立たぬというた一言で。直江が手にかけて殺しやつた

は。即ち母が殺した同然。コレ〜〜嫁女赦してア、勿體ない。乳房に離れて

死ぬ命。思はず知らずお主様の。お役に立つたも因縁とツシ泣かぬ顔するいぢらし

さ。母は一間のいんけん巻携へ。不孝と見えし勤助は却て父の名を上げる。二十四

孝に優りし孝。器量も揃ふ二人の子供。

軍法傳授の此一巻。頂戴しやと差置けば。勤助取つて押敷き。父の苗字を賜

はれば。勤助が身の規模は立つ。母方の氏をつぐ弟直江が母への孝。其德によつて

此一巻は。其方に下さるゝ。御恩を忘れず猶此上。孝行怠る事なけれ。景勝の忠

心は我胸中に徹したれども。得心得難きは親謙信。君に弓引く逆心ならば。汝も

従ふ心や如何に。言ふにや及ぶ。我が子を切つて二君に仕へぬ此山城。兄とはいは

さぬ敵味方。此三畧の恩を仇。一合戦仕らんヲ、さもあらん出かす。我又主

君に仕ふる甲斐の。天目山に立籠り。出合ふ所は川中島。運に乗じて越後の出

城諏訪の城まで押寄せ。さも目ざましき勝負をせんす。ホ、潔しさりながら。假にも一旦景勝に。請けたる恩は

何とくヲ、日月に譬へたる右の眼は越後へ進上。二心なき勇士の固め。母に

身まの爲ならず戀ならず。心なけれど濡衣

興へし片足の下駄。景勝の志捨つるは武士の道ならずと。左の足にしつかと履

きナクあり立つ。庭の高低も。道はゆがまぬ弓取の直なる竹の根もとより。は

つしと切つたる旗竿は。盛運目出たき大將の。誘ふは賢き御笑顔。眠れる花の。

死顔に合抱いてゆぶつてすかしても。返らぬ昔唐土の二十四孝を目のあたり。孟

宗竹の筭は。雪と消え行く胸の中。氷の上の魚を取るそれは王祥。是は他生の縁

と縁。黄金の釜より逢ひ難き。その子賣を切離す弟が慈悲の胸怒と。兄が不孝の

孝行は我が日の本に一人の勇士。今に。名高き山本氏。武田の家の礎と事跡を。

世々に残しける。

第四 道行似合の女夫丸

歌ン偽りの。文字を分くれば。人の爲。身の爲ならず戀ならず。心なけれど濡衣

がナホスフシき夫。の名も。勝頼にオタクリ伴
ふ人も。勝頼というてよしある簀作が。

散し配りて藥賣。今日立出づる。フシ此國

もヲシかいしよありげな。女子の所體。ギン

奇特帽子に。筒脚袴跡に續いて藥荷を。

撥ぐ。脇笠袖笠の。匂はぬ花の降り積る。

フシオタクリ信濃路。へさして。行く道の泊り

くくや。宿々へ商ふ物は草の種。命の種

の生藥。フシ詞に艶を濡衣が。詞そも此

藥は陸奥南部に隠れなき。新羅の家の名

方。萬の病ひに用ひてよし。それ藥一粒

は。たとへ千金萬金にもかへ難き。フシ共

我が夫は。世をさりて。冷泉いつの。世に

かは。兼道木曾の流れの。山川に。女浪男

浪がさて羨まし。フシ夫婦ならねば。つ

い言ふ事もかた田舎。狂情がましい。一

言はいはじ岩間の細道を。歩み馴れたる

脛の雪。二上り風夫は冥土に我が身はこゝ

に。櫻。花かやちり。くくに。花かや櫻。

櫻。花かやちり。くくにナホスフシちりに交
はる神心。伏拜み行く藁が原。道行く人

も指さして。あやかり者とあだ口に浮名

立つるもア、恥かしや。今の我が身は。

なかくく戀も。情も荒れはてし。ギン

オタクリ青柳過ぎて宮田の町。とかく。浮世

は。伊勢の濱荻。難波の蘆とかはれども

かはらぬ。物は夫の名と。おまへもいは

ば勝頼様。いつの世にかはあひ染川の。

身の浮沈み七度は。氷を渡る信濃路へ。

急ぎ行くのが。フシ第一丸。此御薬も簀

作も。もとが新羅の流れにて彼よし是よ

し世の中も。ギンよしと浮世を渡る。ハズミ

川心。にござす墨染の。此身の末は天の

川。空にも戀があればこそ。雲に浮名は

七夕の糸線返し返しつゝ。戀の染衣濡衣

が昔を忍ぶ流行唄。三上り鳴くるかくくと

川下を見れば。川原柳の。影ばかりさり

とは影ばかり。川原柳の影ばかり君を待

ち。忍びくくにつま戸へ來れば。月の影
さへ。氣にかゝるさりとには氣にかゝる。

月のかげさへ氣にかゝるエ、逢ひたや

な。ナホス問ふも語るも。フシいく難所。

野越え里越え山越えて此處の一村彼所の

宿の。軒つゞき薬々と賣り聲もやさし。

しをらし立並ぶ家居に今宵一やどりと暫

く。勞れを。三重へはらしける

詞なう恐ろしやく。怖い咄でちりけ元

から身の毛がよだつ。燈心一筋減すべ

と。相州北條氏時の和田の別墅。村上左

衛門預りて今日留守番の中間小者。百物

語も親方のフシ油甜りと知られける。詞サ

アく。今度は衛内が咄番だ。又おらが。燈

心もよつほど減りうそ暗うなつて隅々が

見らるゝ。信玄の領分天目山と國竝の此

信濃なれば。化物が出てい。わいらもソ

レ鏝元くつろげてをれさ。ヲ、此寒六も

冬平も油断はせない。若し女の化物が出

山。雪の下伏す兎狸猪、狐を狩取らんと村上左衛門義清狩装束花々しく。山案内の狩人召連れ獲物を列卒にさし擔はせ。フシ和田の別墅に立歸り。門開かせて村上左衛門。悠々と打通り。詞ア、冷えるく世上の譬に違はず。犬骨折つてたかの知れた獲物。北條殿の此下屋敷を預かる某。今日の猪狩も私の遊興でない。諏訪明神の神使は年經る白狐。信玄是を信仰して武運を祈ると傳へ聞く。何とぞ此狐を狩りとらんと思へども。神通得たる白狐にて狩人の手に及ぶまじ。さるによつて一國の野狐を殘らず狩取らば。神通得てもさすがは畜生。萬一白狐を射留めたらば莫大の褒美。其旨きつと心得よとフシさも横柄に言渡す。地近習の侍飯山郡太後馳に立歸り。詞某列卒の殿を仕らんと。引下り候所に。高島の坂中にて年ふる雌雄の狐を見出し。弓に矢をはけ

追掛けしに。小笹が隈に逃入つてかいくれに行方知れず。無念千萬仕損せしと。満茅原掻き分けて拽せしに。狐に勝りし女の曲者生捕りて參上致す。ナニ女を生

捕つたとは。必定敵方の紛れ者。幸ひ新身の刀試胸切にしてくれん。地是へ引けと詞の下。引立て出づる。小牡鹿の是も夫戀ふ女と見え。都育のぼつとり風。地女



好の左衛門大口くわつとよく見れば。戀こがれたる腰元八つ橋。其儘抱付きたい所。地家來の手前と、フシ人體作り。詞ホホウ郡太いしくもしたりな。コリヤ女近う寄つて身が顔を見い。ナコレ村上ちや〜。おれを慕うて遙々の所を能うおちやつたなうと。いふ所なれど爰は主人の下屋敷。アレ多くの家來共がナ、合點か。コリヤ者ども此女今夜身が寐間に引きすゑ。新身の段平物を以て。躰の下を試して見ん。寢所に土壇の用意。地急げやつと片頬に蹴面片頬に細目。詞コリヤうぬらは何してをる。早くうせう汝もうせいと地呵り付け。フシ邪魔を拂うて。詞コレ戀人そもじの事を明け暮れに。サヘうつら〜と戀ひこがれ。詞待ちに待つた念が届いて。今日爰へおちやつたはこれ偏に諏訪明神の引合せ。今日から身が奥。但しは嫌か。サ、〜、どうちや〜と、ギン

しなだれかゝり。抱付けば振り放し。私はお主の行方を尋ねぬひ。これより東の方を志して行かねばならず。地お志は有難けれど。地今は歸して給はれと、涙ぐめば。詞そりやならぬ。言ふ事聽かねば百層倍で仇する左衛門。それでもいやか。地何と〜といへど答も泣き入る八つ橋。詞エ、しぶとい女め。コリヤノ、家來共。此女眞裸にして氷責め。八寒地獄の苦みさせい。責めよ〜と高聲に。八つ橋庭にフシきえ入る心地。地折もこそあれ取次の侍罷出で。詞甲斐の國武田信玄の使者高坂彈正越後國長尾謙信の使者越名彈正。通し申さんやと伺へば。村上驚き。フウ長尾は格別。武田とは鋒先を争ふ中。其兩家の使者一所に來たとは心得ず。地何にもせよ對面せずば應るに似たり。詞ソレ逃走りせぬ様に其女には繩ぶつて庭の樹木にく〜し上げい。地敵

國の使者なれば手だれの武士ども次の間に。ぬかるなやつと言渡し。其身も衣服更めてオクリ悠々。へととして。フシ坐しゐたる。地程なく入來る高坂彈正越名彈正。刃を争ふ使者と使者。物をも言はず辭儀もせず。見ても見ぬふり上下の變と。變ともフシすれ合ふ中。地兩人刀拔置きて。遙下つて高坂彈正。口上の趣といはんとするをまつ待て高坂。詞此越名に辭儀もせず。使者の口上マアなるまい。トハなげに。門前へ乗込むも一時。玄關へ上るも一時。身が口上申上ぐる迄。すつ込んで居よ逃彈正。ヲ、此高坂逃げたか逃げぬか只今勝負。地ヲ、合點と刀おつ取り袴のそび取り。サア〜勝負とフシ立向へば。地村上大口明いてから〜と打笑ひ。詞主の使者に立ちながら。汝等が威勢を争ひ。身を果すうつけ武士。身に對しては不禮と言はうか慮外者。察する處長尾

は先達て北條に心を寄する氣。武田も共に氏時の味方となり。此村上とも和睦して。謙信は信玄を亡し。信玄は謙信を亡さんと頼みの使者。謙違ひはせじと村上に。星をさゝりて詞を揃へ。御賢察の通り味方願ひ奉る頼みの使者。お受なされ下さらば。我々迄も大慶と恐入つて述べければ。ホ、ウ我が眼力達はざりしな。兩家の頼問入れぬも武士の本意ならず。兩家の返答依怙なき様に武勇闊。弓矢打物の勝負にて。勝つたる方へ北條村上共に味方。幸ひ是に山狩の弓矢二手。氷を積上げ塚として。一寸二寸的は勝負遅し。五尺的を射させんず。ヤア〜郡太。其しぶとい女めこそ屈竟的的。胴腹を射通させつれない心に思ひ知らせよ。女め引けと細いふ間もなく。縄目血走る細腕。ホッソシながら八つ橋も。フシ泣く〜引かれ立出づる。詞あれ見よ兩人。

此女は足利家の賤の方腰元八つ橋。我部にて見初め。折がな時がなと思ひし處に。今日思はずも此村上が手に入れどもつれない女。我が詞を背く故汝等が勝負に彼めを成敗。我が見る前で胴腹を射通せと。無刀を杖につつ立上り眼を配れば高坂越名。如何はせんと躊躇ふにぞ。詞猶豫すれば味方はせぬ。如何に〜と聲荒らぐれば兩彈正。辭するに及ばず弓矢手挟み。不便には思へども國の爲にはかへ難し。心に篤と觀念せよ。詞サアサア高坂勝負ぬかるな。無ヲ、心得たりと諸共に。弓と矢つがひきり〜と引きしほり弓手馬手へ身を開き。切つて放す目當は村上。射かくる矢先兩手にしつかと。詞ハ、ハ、察する處謙信信玄心を合せ和睦を言立て。此村上を討取らんとは悪か〜。所存も知れざる汝等に。弓矢を渡す左衛門が大肝に。汝等が矢先が立つ

べきか。ヤア家來共女を引立て。無きやつばらを揃。捕れと。聲の中より列卒の者フシばら〜と追取りまく。詞エ、取し寄つて討取らんと計りしに。仕損じて高坂。ヲ、越名無念々々に腮叩がすなと取付くやつばら。右と左に踏みす蹴すゑ一度にかゝれば信玄流。謙信流の太刀打早業。手を碎いたる働きに。家來も列卒もたまりかねむら〜ばつと逃入れば。無目ざすは村上遁さじと。雙方より切りかくるを。引つばつし〜重ねて切込む双と双。ヲ、合點と身をかはし。傍なる火鉢でしつかと押へ。引かん〜ともがく二人が首筋掴み。ぐつと引寄せ締付けられ無念々々ともがけども。膝にかためてびつくと動かさず。詞汝等此村上を專討に討たんとせし。其返報に踏殺さうか。但しは搦殺さうか。如何したら腹が癒よ。ヲ、夫よ。無答の矢を射返さん。

肝のたねに受取れと。尖矢二本逆手に取り喉吭つと一抉り。ゑぐりゑぐられ高坂越名。七頭八側五體をまがき。フシあへなき最期ぞぜひもなき。詞女めは何所にをる。早くくと地呼ばれておづく八つ橋が氣も魂も身に添はず。此體見るよりはつとばかり。袂を顔に押當て。フシそとろに顔ふばかりなり。詞コリヤ八つ橋。おれに敵たふ奴原が。此死さまをよつく見たかと。尖矢引抜きどうど蹴飛ばし。詞女もおれが詞を背くとまつ此通り。嫌でも應でも抱いて寝る。寢所へ來いとフシ引立て行く。コホリ奥は俄に家鳴り。震動。庭の植込ざわくと風に煽つて蠟燭の火影に見れば燭臺に目鼻ありく。三下り唄。朝顔の朝に咲いて。夕には。露の命も戀故ならば。儘よてんぼの皮巾著。珊瑚の珠の目を光らし。腰にもつれてフシ寄添へば。咲村上ぎよつとし。詞

コリヤ何ぢや。フウ聞えた今日山狩の狐狸。我に仇する憎くい四つ足。地目に物見せんと燭臺蹴飛ばし。此方へ來る。フシカ、リ縁側に岩。又によつぼつりと。石燈籠。火袋に顔まさくと。有明の月の眉。目元に色を夜目遠目。笠に苔むす手水鉢。やらじと止むる柄杓の手。跡へ戻れば青天井がくるり。くるりと蛇の目むき出す。轆轤口。開いて窄めて。相合傘の袖と袖。雨や雪霜ふらばふれく。フシ濡しはせじと一本の足手纏ひとなり瓢。コホリ瓢箪から駒下駄も庭の飛石ぐわたくく。待合の半鐘のうなり。くわんく。鐘子。コホリ刀掛字の角軸も。三幅對の竹に虎嘯けは風おこり。龍吟すれば雲起り。炭のおこつた大火鉢。目鼻しかめてナス這寄れば。戸障子襖ぐわたくく。咲すのが村上氣を奪はれ。女を小脇にひんだかへ。行けども行かれず。岩戻れと戻さ

ぬ妖怪に。刀を抜いて切廻れたと雲霧を。三更へ切る如く。地腕もなまり五體も痺れ。眼眩んでよろくと。どうど伏したる村上が形計りはありくと。玄關廣間大座敷書院。床の間御成の間ありつる女も消失せて。館と見えしは信濃路の雪降り積る和田の山吹雪ばかりや。三更残るらん。咲詞返せくと。迷子の殿様かやせ。地かへせくと高提燈に太鼓鐘。升の鹿忽な大名の殿様返せと大勢が。フシ尋ねさまよふ向うより。詞えいさつさサツくサ。地夜道を急ぐ早飛脚。詞コリヤく飛脚物問ふべい。只今われが來る道で。殿様らしい迷子には逢はなんだか。イエく殿様らしいはさて置き。夜の殿にも逢やしません。フウそれならば金作りの刀脇指で。心中などしてではないか。水にはまつて若し死にはなされぬか。イヤそんな事は見當らぬ。迷子の子が大名

なら火にくばらしやろも知れますまいヤ
ア早飛脚が何かといふ間に遅飛脚随分
尋ねさしやませと。フシ道を早めて走り
行く。地家中の者ども力を落し。ア、
おいとしやく。大方狐の業である。今
頃はつきりと。お召がへの雲雀毛が。
穢い物を小豆餅ちやと思召して。ひつた
ものあがるである。イヤ案じて居ても事
が済まぬ。胡散なは此查原。捜して見よ
うと足輕ども。そこよこよと雪かき分
くる萱の影。人こそあれと提燈手ん手に。
見れば見る程。同納もなき迷子の殿様。
申し。迷子の子の殿様いなうと。地聲
に氣の付く村上左衛門。むつくと起きた
る其形は。筵袴に竹大小反打廻して大
音上げ。それを來るは武田信玄。かく
いふは信濃の住人。村上左衛門義清が留
めたやらぬと呼ばはつたり。ア申し。
私はお章服取の化介でござります。フウ

化か。信玄ではないちやまで。あれく
く。卑怯未練の越後の謙信。通道さじ
やらじと。追ふを止むる家來ども。同コ
ハ正體なき且那の有様。人の見る目も恥
ぢ給へと。地抱きとむれば漸うと狂ひ。
伏してゐたりしが。村上漸う心づき。
文彌やあら不思議や。今まで和田の館の
内。越名高坂を刺殺し。我ながらついに覺
えぬ勇力と思ひしが。ナホア同こへはマ
アどうして來た。サア昨日の山狩から迷
子におなりなされ。一家中が一遍三界。
皆麓までお迎ひに參つてをります。ム、
そんならおれが強かつたのは。狐の業か。
成程かのでござります。かのは誰ぢや。
八つ橋か。やれく戀しゆかしと焦れた
戀人。手に手を取つて歌歸ろやれ。足元
を爪立て。ちよこくく。爪立てて。
フシ行かんとするを。家來どもよつてか
かつて。乗物に助け乗すれば徒士若黨。

同乗物參れにはいくく。尋ね逢う
たる太鼓鐘はやし立て。同迷子の殿
様取返した。返した。お先手を振る迷
子の子。逢うてめでたき信濃路のヒツクリ
薄萱原踏み。分けて。ギンいなうやれ我が
故郷へ。三更立歸る。信濃なる諏訪の湖
要害に。立籠りたる館城。長尾入道謙信
は。代々越後の城主として。己が武勇の
鋒先に爰も切取る諏訪の城。新たに建つ
る奥御殿は。義晴公の御幼君。後室手弱
女御前。共にお成を設けの結構。フシ大方
ならず見えにけり。今日ぞ其日と腰元
婢忙し中に立集り。何と皆の衆。去年
からの御普請で結構に建つた奥御殿は。
武將様とやらの後室様のお成ぢやけな。
わしらはそんな事とは知らず。此館のお
姫様八重垣様の御祝言。其拵へかと思う
てゐた。フ、彼の人の言やる事わい。八
重垣様に御許嫁のあつた勝頼様は。去年

の秋御切腹それで其勝頼様の姿を繪に寫し。お姫様が明けても暮れても泣いてばかりござるが。そなたの目にはかゝらぬか。今日の拵へは今日日本の大將軍のお子様なり。其後宝様尋常のお客とは違ふ。

●それで此間より國々の名物をお求めなされるれど。今此諏訪の湖に氷が張詰め。

舟の往来も叶はぬ故。何かが殿い手支へと。役人衆の心遣ひ。詞夫程晴れなお客様の故。念の念を入れて不調法の無い様にとの言付け。新参とは云ひながら物馴れた

濡衣殿何かの事を頼むぞや。ホ、是は又人を術ながらす様に。物馴れたやら馴れんやら。今参りの私御前方に引廻して貰はにやならぬと。●傍撃中のおれそれも。

フシ中よく見ゆる中庭より。●いさせき出づる簀作が今は姿も菊作り。花恥かし

き角額縁先に小腰を屈め。●奥庭の花壇の菊。かゝむを申し延びるを縮め。枯葉

ありければ。●ホ、其兜の事故に奉公に

一枚ない様に残らず手入仕り。漸う只今相仕舞ふと。●言ふ顔うつり腰元中。

さても見事好い男。こんな男に手入しらるゝ菊の花はあやかり物。わしらもどうぞあの人の。手入で小菊が咲かしたい

と。何かな悪口言ひすてに奥へ行く跡幸ひと。●傍見廻し。●濡衣が庭におり立

ち手をつかへ。あなたにお別れ申してより此館へ入込む私。程ふる日敷の明暮も

どうお暮し遊ばすぞと。案じるうちに思ひも寄らず。●菊作りとなつて此館へ。お

出でなされし勝頼様。御思案でもあつての事か。ホ、不審尤も。此家の主長尾謙

信。一子景勝を討つても出さず刺へ。義晴公の志形見松壽君。御母公諸共今日此

館へ招く段。心得難く思ひし故。菊作りとなつて入込む某。汝が役目は法性の兜。

未だ奪取る便りもなきや。濡衣フシ如何とありければ。●ホ、其兜の事故に奉公に

出た私。微塵も油断は致さねど。何をいふても用心殿しく夫故心に任さねど。お悦

び遊ばしませ。今日の饗とあつて。其兜を上段に飾らして候へば。今日を過ぎず

お手に入れん。ずりや其兜が奥の間に。ア、お聲が高いと差寄つて呼び首肯く二

人が相談。フシそれと白洲へ立出づる。●姿一癖ある親仁。●娘々コリヤ娘と

呼ばれて悔り飛退く濡衣。●ア、父様とした事が。あの人に花壇の事を言付けて

居る所を。断なしに娘々と呼ぶ様な。あなた不慮な。何ちや断なしに娘と呼

んだが不疑ちや。こりやおれが悪かつたわい。今度から用があつて呼ぶなら。サ

ア娘今呼ぶぞと先へ断る。ハ、ハ、こりや前髪。わりや花作る事が上手ちやとい

うて。昨日から雇はれて来てゐるが。此花畑は此關兵衛が預かり。今日のお成のお饗になる花故取分けて大事と思ひ。助け

に雇うた花作り。もうお成に間はないが。地
のらばかりかはいて居つて。それで仕
事が出来るかよと。呵られて手もちも
ち。阿イヤモ外の花作ると違うて。不斷手
入のしてある花壇故。何にも仕事はござ
りませす。漸うと枯葉を取つたり。花形
のふりを直すが精際。夫故仕事も思はぬ
扱いき。落葉一枚ない様に掃除まで仕舞
ひましてござります。ム、それなれば精
が出た。花壇が濟んだら外に用なし。次
へ往て休息せいと。地許す詞に箋作がフッ
勝手へこそは立つて行く。詞ハテさて見
かけに似合はぬ精出す奴。鬼角人は陰日
向が大事のものコリヤ娘。地われも随分
精出して御奉公に私すなと。いふも親身
の親子の中。詞ア、父様の忝いお詞。地
稚い時より武田の家に宮仕。不慮の事故
親里へ戻つて見れば。詞父様も今では長
尾の此家へ奉公を幸ひに。親子一所に宮

仕。地新参者でも侮られず。傍輩衆にも
憎まれぬはお主の御恩父様の蔭。仇疎か
には存じませぬ。詞ア、さう思へば冥加
がよい。此親も御領分に狩人を商賣に。
かつくゝに暮した身分。謙信公の見出し
に預かりお館に置かるゝは。此屋敷に在
る諏訪法性の兜とやらは。諏訪明神より
賜はつて。即ち神の使しめ。狐が寄つて番
をする不思議の兜。そこで又野狐どもが
其兜を戴けば。官上りするとやらで折々
館を徘徊する。見付次第打殺せと。アレ
座敷先に小家をしつらひ。狐の番が役な
れども。勇氣盛んな謙信公何の狐が来よ
う筈もなし。安閑としてゐる際に仕覚え
た花畑。時ならぬ菊を作るがお氣に入つ
て。狐の事は餘所になり。今では菊の花
守親仁。地樂々と暮すも主人の蔭と。互
の身の上しみるゝと親子話の折からに。
早や御成と騒ぎ立ち奥へ行く人戻る人。
心せき兵衛濡衣もフッ奥と口とへ別れ行
く。地館の主長尾謙信衣冠正しき設けの
式禮。角立つ中にさと薫る音もしとくゝ
女中の手兒。フッ邊舞く鉦乗物。見るよ
り謙信謹んで。詞優曇花とやいはん稀代
の御入來。冥加に餘る身の面目。地直に
其儘奥御殿へと。指圖に隨ひ乗物は。奥
へ行く跡謙信も。續いて入らんとする所
へ。詞暫く待つた長尾謙信。奥方よりの御
上意ありと呼ばはる聲。地はつと平伏頭
を垂れ。待間程なく立派の背柄。長袴の裾
けはらし。上座にとつかと威儀を正し。
先以て今日は御幼君松壽君。御母公共に
入來の面目恐悦に思はるべし。さるによ
つて母君より。貴殿への上意餘の儀にあ
らず。先達て申渡せし子息景勝の首。今
において討つても出さす。事延引にせら
るゝ段必定野心に極まれば。御前におい
て切腹を遂げらるゝや但し。景勝の首只

今討つて出さるゝや。返答次第計らふ旨あり。謙信いかゞと上使の權柄。此地は思ひ寄らざる御上意と。顔振上げて。同ヤア汝は倅景勝と驚く謙信さあらぬ上使。イヤ景勝にもせよ誰にもせよ。一旦倅を討つべしと契約ありしは諸大名の真中。今において其沙汰なく。剩へ本國に引籠り。底の知れざる親人の所存。イヤサ謙信の心底と人の疑ひ立ち申す。何故さつぱりと我等が首。イヤサ倅景勝の首討つて心底は見せられぬ。サア首討つか但しはいやか。有無の返答承らん。サア〜何と詰寄れば。流石名を得し謙信も。倅を倅が討手の上使。返答何と當惑のフシ口を噤んで見えにけり。同ヤア未練の心底。此上は某こゝにて切腹と。指添に手をかくれば。ヤレ暫く。必ず早まり給ふなど。地聲をかけて花守關兵衛。何か白洲へ白菊の。フシ花拂へて立出づれば。

同ヤア汝等如きを知る事ならず。退去れやつと景勝の。怒りにちつとも隠せぬ關兵衛。イヤ下として上の事。差出るではござりませぬぞ。最前よりあれにて様子承れば。如何やら斯う木乃伊取が。木乃伊になる様な御上使様。可憎しき侍の首切つて仕舞へば再び生からぬ。又此花は何ぼ切つても生けらるゝ。ナ切つて生かすといふ傳授お望みならば差上げたいとどこやら詞の理窟。聞いて謙信眉を皺め。同ム、切つて生けると言ふ白菊面白し〜。關兵衛其花所望せん。成程花は上げませうが。花ばかりでは自由に生かされぬ。夫を生かすは花作り。幸ひお次にをりますれば。是へ呼寄せ共々に。生ける傳授を御覽あれ。花作りの鑿作御用がある。早う〜と親仁が呼ぶ聲菊作り。同エ、けたましまし何事と。此場の様子しら洲の内。息せき出づる顔形。同ヤア

汝は武田勝頼といふをとどめて。ア、申し〜それ仰しやるとものがない。何にも知らぬ白菊の花。其生け様を能う覚えた此花作り。人の振見て我が振直すが第一の傳授事。ナ是さへ御所望なされば何もかもさつぱりと申譯の立ちさうなもの。憚りながら親仁めは存じますると。鑿作が身の上それと白砂に。額、フシ摺り館に召抱へんが。わりや謙信に奉公し花の生け様傳授せんや。ハイ成程外の事なら存じませぬぞ。花一件なら生かさうと殺さうと我等が得物。夫を取柄にお抱へなされて下されうなら。望んでなりと御奉公したき御屋敷。ホ、出かしたうい奴。御上使への御返答申上ぐるはあの鑿作。まづそれ迄は暫しの御猶豫。偏に頼み存すると。餘儀なき頼みに打頼き。同火急の御上意容赦はならぬぞ。塩尻峠に

控へ居る諸大名へ申渡す仔細あれば。我は彼處へ立越えん。有無の返事は塩尻まで。隙どらば直に此城取圍まん。追付け有無の御返答。認むる中装作も次へ參つて衣服大小。ハア、有難しと。勇む装作景勝は。苦り切つたる塩尻へオクリ別れて。フシへこそは出でて行く。跡見送つて關兵衛は。謙信の前に手をつかへ。花作りの装作合點が行かぬと存ぜしが。あれが大方ホ、紛もなき武田勝頼。夫と見出しし花守關兵衛。下郎に似合はぬ中々器量のある親仁。其性根を見込み改めて謙信が。頼み入れたき仔細あり。我に頼まれ得させんや。返答聞かんとありければ。是は又改まつたお詞。元獵人の私。お見出しに預かつた君の之恩。縦へ命の御用でも。いやとは申さぬ我等が魂。ホ、頼もしく。其詞を聞く上は。向をか包まんは見よと。しづ／＼立つ

て一間の障子。開けば内に怪しき牢輿。關兵衛不思議とさし覗き。牢輿の内には科人らしき者も見えず。何やら見馴れぬ變つたのも。そりやマア何でござりますと。尋ねに謙信威儀繕ひ。未だ日本へ渡らざれば。汝等が知らぬは理これこそ鐵砲と名付けし飛道具。ム、其又鐵砲とやらが盗みでも致せしか。何の爲に此牢輿へ。ホ、科は天下を望む叛逆。さいつ頃武將の御前へ。薩州種が島の浪人。井上新左衛門と名のり。此鐵砲を献上し。類なき軍器の重寶。遣ひ様の傳授せんと。曠し寄つて義晴公を一撃に。跡くらまし其場を逐電。草をわかつて尋ね搜せど。今に行方知れざる曲者。詮議の手筋は此鐵砲。其所に残りありしが。即ち科人同然なれば。この如く禁卒させ。日毎の拷問手を盡せど。義晴公を撃ちたる敵今日まで白狀せざる不敵の鐵砲。只今より此詮

議。汝に申付くる間。火水を以て責め討み。敵の所在を白狀させよと。鐵砲くらりと投げやれば。手に取上げて呆れ顔。すりや私にお頼みあるは。此鐵砲とやらを責めいでござりますか。是は又思ひも寄らぬ。拷問も問状もなみ／＼の人間なら。及ばずながら責めも致さう。烟管屋の看板か。唐の火吹竹見る様な物。責めいとは御難題。あなたの方の手にさへ合はぬ物。其上何を證據手がかりも。ア、手掛り證據は其鐵砲の遣ひ様。普く世上に知る者なし。其傳授を覚えし者こそ。ム、すりや何と御意なされます。此鐵砲の遣ひ様を覺えた者が。ホ、即ち武將を撃つたる敵。スリヤどうでも詮議を私に。仕損ずまじき汝が魂。アノ此親仁が性根魂を。サア見込んで頼むに違背はあるまじ。油斷致すな關兵衛と。詞も重き大將のフシ心残して入り給ふ。ア、

申しく。我等風情にこんな役目。難題も事による。地外へ仰付けられたいと。跡を眺めて。ム、未だ日本へ渡らぬ鐵砲。遣ひ様を覚えし者が。義晴を撃つた敵。此關兵衛に詮議せよとは。ム、合點の行かぬ謙信と。諸手を組んで工夫の顔色。ア、いやく。どう思案して見ても。我等には似合はぬ役目。やつぱり似合つた花の番。鳥威の弓矢より。外には何にもしら髪うらみの親仁。地ちドレれ小家せがへ往いて一休いっしゅうみと。振ふ擦さげたる鐵砲も。胸むねに一物いあり明あの。オオクリ月つき漏もる。フフンン臥ふ所じょへ行いく水の流ながれと人の。簀すい作さくが姿見すがたみかはす長上下。悠々として一間を立出で。我民間に育ち人おこに面おもてを見知られぬを幸さいひに。花作りとなつて入込みしは。幼君の御身の上。若し過ありあらんかと。餘所あまながら守護する某たそれを悟さとつて抱かへしや。地ちハテ合點の行かぬと差俯さへ向き。思案しあんに塞ふが

る一間には。フン館の娘。八重垣姫。許嫁ある勝頼の。切腹ありし其日より一間所に引籠り。床に繪え姿すがたかけまくも御經讀誦ごきやうどくの鈴すずの音ね。此こ方なたも同じ松蟲まつむしの鳴なききに袖そでも濡ぬる

衣いが。ステステ今日けふ命いのち日を弔なぐさひの位牌ゐはいに。向ひ。手を合せ。詞廣ことひろい世界よこに誰たあつて。前の忌日きじつ命いのち日を。弔なぐさふ人もなさせなや。父御ちちのみことの悪事あくじも誰た知らず。お果はてなされた



お心を。思ひ出す程おいとしい。嗚や未來は迷うてござらう。女房の濡衣が心ばかりの此手向。千部萬部のお經ぞと。思うて成佛して下さんせ。南無阿彌陀佛。くく誠^{マコト}に今日は霜月廿日。我が身代りに相果てし勝頼が命日。暮れ行く月日も一年餘り。南無。幽靈^{ウレイ}出離^{シュツリ}生死^{シジ}頓生^{トンスン}善提^{ゼンテイ}。申し勝頼様。親と親との許嫁^{ヨメ}ありし様子を聞くよりも。嫁入する日待ちかねて。お前の姿を繪に描かし。見れば見る程美しい。こんな殿御と添臥^{ソノイ}の。身は姫御前の果報ぞと。霜月にも花にも樂みは。繪像^{エゾウ}の傍で十種香^{ジュウシュウカウ}の。塵も香花^{カウカ}となつたるか。回向せうとてお姿を繪には描かしはせぬものを。魂返^{タマヒカエ}す反魂香^{ハンタマカウ}。名畫^{ナゲ}の力もあるならば可愛とたつた一言の。お聲が聞きたいくと。繪像の傍に身を打伏し流涕^{リウテイ}。これが見え給ふ。あ泣聲は八重垣姫よな。我が名を呼びし

勝頼を。誠の夫と思ひ込み。申ふ姫と申ふ濡衣。不便ともいじらしとも言はん方なき二人が心と。ステそじろ涙に。くられるが。ア、我ながら不覺の涙と。袴かき合せ立上る。後にしよんぼり濡衣が。申し装作様。合點の行かぬは貴方のお姿。どうした事で此様に。ア、不審尤も。測らずも謙信に抱へられたる衣



服大小。テモ扱も。衣紋付なら上下の召し様まで。似たとは愚かやつぱり其儘。形見こそ今は仇なれはなくば。忘るゝ事もありなんと。詠みしは別れを悲しむ歌。形見さへちやに我が夫に微塵かはらぬこのお姿。見るに付けても忘れぬ。

私や輪廻に迷うたさうな。御赦されてと伏沈む。ッ泣聲洩れて。一間には不審たち聞く八重垣姫。そつと襖の間もる姿見まがふ方もなく。ヤア我が夫が勝頼様と。飛立つ心を押ししづめ。正しうお果てなされしもの。似たと思ふは心の迷ひ。繪像の手前も恥かしと立戻つて手を合せ。御経讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣が心を察して聲登り。調はかなき女の心から。歎くは理さりながら。定めなき世と諦めよと。陳むる詞此方には。心ヲ空なる其人の若しや存へおはすかと。思へば戀しく懐かしく又覗いては繪姿に。

見くらべる程生寫し似はせでやつぱり本本の。勝頼様ぢやないかいのと。思はず一間を走り出でエテ縋り付いて。泣き給へば。はつと思へどさあらぬ風情。詞こは思ひよらざる御仰せ。我等装作と申す花作り。漸う只今召抱へられ。衣服大小更めし新参者。勝頼とは覚えなし。相あるなど突放せば。今父上に抱へられし新参者。花作りの装作とや。自らとした事が。餘りよう似た面ざしの。若しやそれかと心の煩惱。二人の手前恥かしながら。此装作とやらいふ人を。そなたは疾うから近付か。エイ。いやいの。知る人であらうがの。アノお姫様とした事が。たつた今見えたお人。何のママ私が。イヤ隠しやんな今の素振。忍ぶ戀路といふ様な。地可愛らしい中かいのと。思ひもよらぬ詞に悔り。調オ、お姫様のおつしやる事

わいの。人にこそよれ。何のあなたに勿體ない。ム、勿體ないといやるからは。どうでも其方の知るべの人か。イ、エさうではなければ。大事のお主の目を掠め。忍び男を拵へるは。勿體ないと申す事でござります。ム、すりや知るべの人でなく。殿御でもない人なら。どうぞ今から自ら。可愛がつてたもる様に。付ながら媒を頼むは濡衣様よと。夕日眩く顔に袖。顔に袖。ヤンシあてやかなりし其風情。調ヲ、お姫様とした事が。まだお子達と思ひの外。大それたあの装作殿を。サア見初めたが戀路の始め。後とも言はず今爰で。媒せいとおつしやるのか。我をれ。ほんにお大名のお娘御とて。油断はならぬ戀の道。品に寄つたらお取持致しませうが。コレノ濡衣。必ず鹿相いふまいぞ。サア何もかも私が。吞込んで。吞込んでお取持致すまいものでもないが。眞實

底から装作殿に。御執心でござりますかと。地問はれて猶も赤らむ顔。勤めする身はいさ知らず。姫御前のおられもない。殿御に惚れたといふ事が嘘偽りにいはれうか。御其お詞に違ひなくば。何ぞ惱な誓紙の證據。それ見た上でお媒。地ヲ、夫こそ心安い事。其誓紙さへ書いたらば。御イエ〜。それも此方に望みがある。私が望む誓紙といふは。諏訪法性の御兜夫が盗んで貰ひたい。ヤア何といやる。諏訪法性の御兜を。盗み出せといやるのは。扱はあなたが勝頼様と。地言ふ口押へて。御ハテ滅相な勝頼呼ばはり微塵覺えのない装作。鹿忽ばし宜ふなど。地いふ顔つれ〜打守り。許嫁ばかりにて枕かはさぬ妹背中。お包みあるは無理ならねど。同じ羽色の鳥翅。長地人目にそれとわからねど親と呼び又つま鳥と呼ぶは生ある習ひぞや。いかにお顔が似ればと

て戀しと思ふ勝頼様。そも見紛うてあられうか世にも人にも忍ぶなる。御身の上といひながら。連添ふわたしに何遠慮。ついかう〜とお身の申明して。得心さしてたべ。それも叶はぬ事ならば。いつそ殺して〜と。ッシ絶り付いたる恨泣き。地勝頼態と聲荒らげ。御ヤア聞分なき戲言。いか程に宜ふとも。覺えなき身は下司下郎。餘處の見る目も憚りあり。地そこ退き給へと突放せば。御スリヤどの様に申しても。勝頼様ではおはさぬか。ハア、地はつとばかりに装作が。差添逆手に取り給へば。こは御短慮と止むる濡衣。御イヤ〜放して殺したも。勝頼様でも無い人に。戲言言の恥かしや。心の穢れ繪像へ言譯。どうも生きては居られぬと。地又取直すを猶も押し止め。御ヲ、さすがは武家のお姫様。天晴なるお志。其お心を見るからは。勝頼様に逢は

せませう。ソレそこにござる装作様が。御推量に違はず。あれが眞の勝頼様。ちやつとお逢ひなされませと。地突きやられては流石にも。初めの恨み百分一聞えませぬが精一杯。跡は互に抱付き。つい濡れそめに濡衣もッシ心ときつく折からに。地父謙信の聲として。御装作はいづれにをる。塩尻への返答。地時刻移ると立出れば。はつと装作飛びしさり。御支度よくば直様參上。ホ、委細の事は此文箱に。片時も早く罷越せ。地はつと領掌文箱携へッシ塩尻さして急ぎ行く。地謙信跡を見送つて。御ヤア〜者共。用意よくば早や來れと。地仰せにはつと白須賀六郎原小文治。更科なんどの體代の郎等。御前に進めば謙信勇んで。御今此諏訪の湖に。水閉れば渡海は叶はず。塩尻までは陸路の切所。油斷して不覺を取るな。地ハア、畏り奉るとハズミシ

勇み進んでかけり行く。地あとに不審は八重垣姫。申し父上ことゞしい今の有様。何事やらんと尋ねれば。詞ホ、あれこそは武田勝頼討手の人数。何勝頼様を討手とは。地ここはそも如何に何故かと。驚く二人をはつたとねめ付け。諏訪法性の兜を盗み出さんうぬらが工み。物かけにて聞いたる故。勝頼に使者を言付け。歸りを待つて討取らさんと。膝し合せし討手の手配。エイそんなら今の討手の者は。勝頼様を殺さん爲か。ハア、地はつとばかりにどうぞ伏し。今日は如何なる事なれば過去り給ひし我が夫に。再び逢ふは憂鬱花と悦んで居たものを。またも別れになる事は。何の因果ぞ情なや。父のお慈悲にお命を。どうぞ助けて給はれと。ステキどき。歎くに目もやらず。

うせうと小腕取り。情容赦もあら氣の大將ヲシ帳臺。深く入り給ふ。歌思ひにや。焦れて燃ゆる。野邊の狐火。小夜更けて。狐火や。狐火野邊の野邊の狐火。小夜更けて。ナホス幾重洩れくる爪音は。君を儲けの奥御殿。こなたは正體。涙ながら。詞アレあの奥の間で檢校が。諷ふ唱歌も今身の上。地おいとしいは勝頼様。かゝる工みのあるぞとも知らず量らぬお身の上。別れとなるもつれない父上。諫めても歎いても聞入れもなき胸窓心。娘不便と思すなら。お命助けて添はせてたべとステキ身を打伏して歎きしが。詞いやゝ泣いては居られぬ所。追手の者より先へ廻り。勝頼様に此事を。お知らせ申すが近道の。地諏訪の湖舟人に。渡り頼まん急がんと。小袂取る手もかひなくしく。かけ出でしがイヤゝゝゝ。詞今湖に氷張詰め。舟の往來も叶はぬ由。歩路を行き

ては女の足。何と追手に追付かれう。地知らすにも知らされず。みすゝ夫を見殺しに。するは如何なる身の因果。詞ア、翅がほしい。羽がほしい。飛んで行きたい。知らせたい。地逢ひたい見たいと夫戀の。千々に亂るゝ憂き思ひ千年百年泣明し。涙に命絶ゆればとて夫の爲にはよもなるまじ。此上頼むは神佛と。床に祭りし法性のヲシ兜の前に手をつかへ。詞此御兜は諏訪明神より武田家へ。授け賜はる御寶なれば。取りも直さず諏訪の御神。勝頼様の今の御難儀。助け給へ。救ひ給へと兜を取つて押戴き。押戴きし佛の。若しやは人の咎めんと窺ひおる飛石傳ひハミ庭の溜りの泉水に。映る月影怪しきは慥に狐の姿。此泉水に映りしは。地ハテめんようなどときつく胸。撫でおろし。こはゝながらそろゝと。差覗

く池水に。フシ映るは己が影ばかり。調
たつた今此水に。映つた影は狐の姿。今
又見れば我が佛。幻といふ物か。但し迷ひ
の空目とやらか。雄ハテ怪しやとつお
いつ。兜をそつと手に捧げ、コハリ視けば又
も白狐の形。水にありく。有明月。ナホス
不思議に胸も濁江の。池の汀にすつくり
と眺入りて。フシ立つたりしが。調誠や當
國諏訪明神は。狐を以て使はしめと聞き
つるが。明神の神體に等しき兜なれば。
八百八狐付添ひて。守護する奇瑞に疑ひ
なし。オ、それよ思ひ出したり。湖に水張
詰むれば。渡初する神の狐。其足跡をし
るべにて。心安う行來ふ人馬。狐渡らぬ
其先に。渡れば水に溺るゝとは。人も知
つたる諏訪の湖。雄たとへ狐は渡らずと
も。夫を思ふ念力に。神の力の加はる兜。
勝頼様に返せとある。諏訪明神の御教。
ハア、忝なや有難やと。兜を取つて頭

にかづけば。忽ち委狐火の。こゝに燃え
立ちかしこにも。亂るゝ姿は法性の。兜
を守護する不思議の有様。此方の間には
手弱女御前。始終の様子窺ふとも。いさ
白菊の花の番小屋にとつくと關兵衛が。
付廻しても神通力。花のまにく。フシ見
えつ隠れつ神去る狐。雄南無三寶とせき
立つ關兵衛。狙ひ的は手弱女御前。ど
つさり響く鐵砲の。音を合圖に遠近より。
俄に響く鐘太鼓。亂調に打立つれば。騒
がぬ關兵衛廣庭に二王立。程なく馳せ來
る雜兵原。我討取らんとひしめいたり。
調ヤアしをらしき有財餓鬼。此世の暇取
らさんと。雄大刀するりと拔放し。當る
任せに難立てく。御殿をさして。三軍へ行
く先の。フシ間ごとく。は。森々とオン
灯火消えて音せぬは。敵の油斷をりこそ
よけれ。烏帽子素袍も忍び入る。時の用
にぞ大廣間。咎むる人もなかな廊下。オクリ
長袴の。裾コハリ指足に。御座の間近く窺
ふ關兵衛。調怪しとかねて勝頼が。雄透
かせと見えぬ眞の闇。人こそあれと身を
避くれば。此方も避くる彼方の一問。調
立塞がつたる三郎景勝。雄遣り過してか
け入るを。袖引きちぎれば手にさはる。
下の腹卷スハ曲者と。組付く景勝小手返
し。調ひらりと付け入る勝頼を。雄さし
つたりと眞の常。たちく。フシと
後じさり。雄騒がぬ大膽しすまし顔。人
を欺く坂東聲。調大將の御座近く帯劍の
武士叶ひ申さず。銘々詰所の當番大切に
致されよと。雄外さぬ體にしづくと
フシ。猶奥深く行く所を。調ヤア〜美濃
國の住人。齋藤入道道三とままれやつと
聲かけられ。雄肝にこたへて駈戻り。邊
をきつと大音聲。調ヤアラ訝かしや。三
十年來跡をくらまし。包み隠せし我が本
名。齋藤道三と呼んだるは。そも何奴ぞ

對面せんと、廣縁先に枯木立。景勝勝
 頼前後をかこひ。逃げば切らんと詰めか
 くる。後の櫓さつとあけ。武田の忠臣山
 本勘助。叛逆人の詮議をとげんと。悠然
 と立出づる。續いて近習諸大名。御殿廣
 間も燭臺に。一度に輝く灯の光。フッ遁
 れん方こそなかりけれ。地されどもちつ
 とも隠せぬえせ者。詞ヤア長尾謙信の此
 城へ。日頃不和なる武田の家臣。山本勘
 助とやらんのさばり来るも心得ず。叛逆
 人の詮議とは。誰が詮議それ聞かうホ、
 ウ匹夫下郎の分として。天下に仇する汝
 が本名。知つたる仔細は此一品。七重八
 重。花は咲けども山吹の。みの一つだに
 なきぞ悲しき。此袋覚えがあらうがな。
 諏訪明神の力石。出會うた横蔵。珍らし
 い對面するなア。此歌は汝が先祖。太田
 道灌が列ねし一首みの一つだになきぞ悲
 しきとは。足利殿に攻落され。美濃國を

切取られし其鬱憤にて義晴公を鐵砲に
 て。撃ち奉る叛逆人の張本。美濃國の道
 三と。表はす袋は身の破滅。最前撃つた
 る鐵砲の術。覚えし者は汝一人。我と我が
 身の白狀明白。諍ふな齋藤と。地大地を
 見ぬく詞の石火矢。三人中へ取込めて。
 フッ何と〜ときめ付くれば。地ほくほ
 くとうち傾き。詞ホ、さすがは武田の軍



師と。呼ばるゝ勘助よく見付けた。我が先祖道灌は。謙信の先祖上杉が鎗先にかかつて死したる恨みの元は足利の武將。頼つて殺さん其爲に。北條氏時に賄し。心を合せやすく。義晴は撃つたれども。志形見の松壽丸。今日此館へ来るは幸ひ。奪ひ取つて人質とし。謙信信玄氏時をも皆殺し。一天四海を掌握する此道三。汝等が手にはいつかなく。義晴を殺した鐵砲で。手弱女御前もぶち殺した。松壽丸を是へ出し。降参せよと睨付くる。ホホウ根強く仕込みし謀叛人。かゝる危き敵の中へ。足利の公達がふかゝると來り給はんや。松壽丸の御入と。偽り來たは此勘助。最前鐵砲にて撃たれ給ふ。手弱女御前の御死顔。篤と拜見仕れと。出す女の切首。押取つてよく見れば。ヤアこりや娘濡衣か。コハ〜如何にと頓頭牛亂。調エ、口惜しや奇怪や。數十年の



鬱憤を。一時に散ぜんと思ひしに。勝頼しみ齒。ぎり。そゝぐ涙は諏訪の海。スエテが恩に引かされて。敵方へ卷込まれ。大一度に溶くる如くなり。調ヤア返らぬ縁望ある此親に。痛よくも不覺を取らせし言絶體絶命。尋常に細かゝれと。無兩人。憎い女が死様やと。首を打付け齒。ぎ一度に立ちかゝる。シヤ物々し道三が。

死物狂ひと立上る。弓手の脇坪はつしと射る。白羽の矢先は長尾謙信。威風烈しき眼中に。道三どつかと坐を組んで。引抜く鎌が腹に。ぐつと突き立て目を見開き。祖先より遺恨ある上杉が子孫。謙信の矢先にかゝるは。我が運命の盡きる所。本國を切取られ。美濃一つだになかりし無念。美濃尾張兩國を従へ。終には國家を握らんと思ひしが。我が身の終りとフシなりたるか。地及ばぬ望みに足利の。武將を撃つたる其天罰。調信玄謙信中あしく見せかけしも。我を見出す計略とは。今まで知らざる心の淺はか。最期に魂改むる此世の餞別。北條が城廓の案内は。某具に傳へ申さん。元來相州小田原の城。堀深うして舞高く。要害の名城なれば。たやすくは落つべからず。霞晴れたる時節を窺ひ。箱根山より見下せば。コト敵地の構よく知るべし其時に謙

信が家の軍法細作の。ナカ犬を入れ置き後より。調勘助是にと切つて出で。放火を合圖に甲斐越後。諸軍一度に矢先を揃へ指詰め。引詰め。地射るならばさしも堅固の城なりとも。直に乘取り氏時が。首を巷に晒さんは道三が。フシ老後の思ひ出。地さらばくと引廻す。心も清き武士の。死しても残す名の譽。家の譽と法性の。今ぞ兜を甲州へ。戻す兩家の確執も。をさまる婚禮三々九度。勝色見する紅梅の色ある勝頼勇ある景勝道三が。仇も恨みも暗れ渡る。諏訪の湖歩渡り。夜もしののめに明渡る。甲斐と越後の兩將と其名を。今に残しける。

第五

地甲斐越後兩家の戦ひ。四度の軍術五角にて。勝負一時に決せんと劍の刃音聞の聲ン山河も。動くばかりなり。地かゝる

所へ北條氏時村上左衛門義清。軍兵あまた引連れて暫しと石に腰打ちかけ。調コレノ村上。某が思ひの通り兩家の滅亡今此時。なんと村上味いでないかと。地人喰馬に合口の左衛門。調ハア、いか様仰しやる通り。突が雙方の戰場。兩人ながら籠の鳥。必ず氣遣ひし給ふなと。地訶ばかりは達者でもフシ脇はがたく調ぶるひ。地軍兵ども口々に。アレくここへ數多の入音。暫く是へと森の内。かかりし所に武田信玄。勝頼彈正引連れ團扇打ちより宣はく。調只今の注進は必定味方の勝軍。この勢を失ふべからず。地急げくと血氣の大將兩人は。はつと領掌白毛の駒フシ纏をはまして駈出づる。地思ひも寄らぬ蛆陰より。長尾謙信是在り見参やつと呼ばはる勢。雲に羽を伸す龍虎の挑み。調馬も達者乗人も達者。眞一文字に乗りかけ。く眞甲二つと切付

くる打刀。謙信謙信透さず軍配軍配團扇団扇にはつしと受止め。詞引けば付入る受身の勝。謙信吳子が秘術を盡せば。信玄孫子が心を捻ひねり。兩方互角の大將自身の働き。生死の境目さましくもまた危けれ。信玄猶も床几を去らず。又打込むを團扇団扇の拂ひ。かゝる折から駈來る高坂彈正。山城が是はと驚き立寄れば。どつと寄せる北條勢右往左往になぎ立て。追廻し跡を慕うて。三度かけり行く。又も駈來る信玄が謙信やらぬと打掛かる。コハ。いかにと雙方を見れば寸分變らぬ信玄。以前の信玄兜を脱捨て。詞ヤア誰かは知らぬども。我に代らんと思ふ志は忝けれど。所詮運を天に任せしこの兩人。サア謙信おくれしか。勝負せよとツシありければ。此方こちらの信玄兜を脱げば山本勘助。二人が中に割つて入り。詞ハア、其お詞は重けれど此勘助が察するには。

御兩人共に國家の爲に此軍。北條村上を討亡討亡さんとの謀とくより知つて某が五百騎の勢を廻し。兩人ともに早や搦め捕つたり。ヤア。兩人氏時村上を引かれよと。詞の中武田四郎勝頼。長尾三郎景勝兩人を引据ゑさせ。天下を騒がず極悪人思ひ知れと兩人を。指通し。勝鬨勝鬨上勝鬨上げて都入嫁入國入悪人退治。天一天上先勝の二人の。大將二人の彈正。名を末代に山本氏御代萬。歳とぞ祝ひける。

明和三年
丙戌正月十四日

作者

近松半二
三好松洛
竹田因幡
竹田小出
竹田平七
竹本三郎兵衛